

純白の薬師

星野 澄華

プロローグ

人々は太古より、神々に特別な力を持つことを許された。

人々はその力と共にあり、その力の恩恵に感謝して生活を営んだ。

しかし、神々が思った以上に、人々の心の中にはどこまでも広がる穴があったのだ。

その穴は、いくら魔法を使っても埋まるものではなく、いつしか人々は気が付いた。

これは、欲しいものが手に入らないからこそある空虚なのだ。

それから、人々は次第に神から賜った特別な力を、物、土地、心を

他者から奪うために使い始めた。

神々は何もしなかった。既に見放していたのかも知れない。

そのうち人々は他者を癒す能力を忘れていった。

誰も傷つく者を救えなくなった。

人々が危機感を感じ始めた折、治癒の力を持つ者たちが現れた。

彼らは薬師と名乗った。彼らは植物や鉱物といった自然物から薬を作った。

人々は彼らに傷や病を治してもらうようになった。

彼らは、魔法のそれよりも限界はあるが、誠実に人々を癒していった。

彼らは、人々とは異なっていた。

魔法を使う術を持っていなかったのだ。

しかし、人々がそれを哀れに思ったり、時には嘲りを投げかけても、

薬師たちが魔法を渴望することはなかった。

ただ、自分たちの使命を黙々で行うのみだった。

――いつしか、国々は薬師を王宮に有するようになった。

第1話

開け放した窓から吹き込んできた風が、大切に育てている草花を揺らす。一本の濃い緑の草に手を添え、手折ろうとしていたのを止め、上を見上げた。硝子で覆われた天井からは、蒼穹を横切る白い雲がゆっくりと動いていた。しばらく天気が崩れることはないだろう。

蔓籠を抱え直し、再び植物を摘み取ろうと視線を落とす。

茎を指で挟み、なるべく切り口が乱れないようにする。小刀を使えば早いのだが、それを使うと僅かではあるが、再生が遅くなるのであまり使いたくはない。

隣に生えている花もいくつか籠に入れていく。多すぎてはいけない。必要な分だけ、過不足なく自然から受け取るのだ。そう教わったし、実際にそうしないと偏りが生まれるのは分かっていた。

このぐらいで十分か、とついていた膝を起こそうとした時、背後から声が聞こえてきた。

「ここにいたのか。草木の影になって見えなかった」

振り返る。爽快な雰囲気と気品が不思議に入り混じった長身の男がそこに立っていた。ゆったりとした装束に身を包み、装飾品は最低限に抑えている。赤茶の髪、強い光を放つ抜けるような青い瞳。

「陛下……」

急な訪問に驚いて目を瞬かせると、相手はふわりと笑みを浮かべた後、もはや挨拶と化した答えを返した。

「二人の時は、名前と呼ぶように言っているだろう、ランシャ。こんなところで堅苦しい挨拶は御免だ」

親しげな口調に、思わず笑みがこぼれる。立ち上がって服についた土を払うと、向き合って改めて尋ねた。

「クラディアン様、なぜここに？今日は国の重要な会議があると聞いていましたが」

名前でも呼んでも、様付けをするのは、いくら直すように言われてもランシャが頑として直さないことだ。いくら直々に言われたとしても、彼と自分には大きな身分の差がある。いつどこで誰の耳に入るか知れないのに、友人のように呼びかけるのは躊躇われた。たとえ彼が、自分を弟妹のように可愛がってくれたのだとしても。

まだ不服そうな顔をしているのは大国エンディウスの国王、クラディアン・エンディウスその人である。まだ若いながらも先王からの王位継承後、国民の人気は高いまま衰えるところを知らない。整った風貌だけでなく、政の手腕も優れたものであった。そして自分の民が窮することがないように手を尽くしているのも城の内外から高い信頼を得ている理由だった。

対するのは若き宮廷薬師、ランシャ。その美しさは城内随一との評判である。切りそろえられた前髪、横髪が清楚な雰囲気をより強くしている。艶やかな漆黒という珍しい色で、後ろだけ長く伸ばしてゆるく一括りにされている。クラディアンが知る限り、そのような髪色を持つ人間は聞いたことがない。そして、その瞳も不思議な紫の色合いで、光の度合いによって夕夜や熟れた葡萄の色に見えた。

第1話

「全く……」

王陛下は溜息を吐くが、すぐに顔を上げると微笑を顔に浮かべた。

「まあ、慎み深いのはいいことだと考えることにしよう。ところで、料理長が料理に使える薬草を所望していたよ。どうやら風邪が流行り始めているようだ」

「そうなのですか？しかし、わざわざ陛下が……」

お伝えするようなことでもないでしょう、と続けるのを王が手を上げて遮った。

「それはここに来るための口実だ。この数日、会議と謁見尽くしで肩が凝る。ここは息抜きが出来る城で唯一の場所だからな」

「最近はお忙しいようですね。……今日もお茶をお出ししますか？」

ああ、頼むと言われて、籠を両手で持つと”洞窟”の方へと歩き出した。

ランシャの作業場所は、薬草畑——畑と言っても区画されているわけではなく、地面一帯を薬草が覆っており、道以外に割れ目を見つけることはできない——の奥にある。”洞窟”というのはランシャが付けた綽名のようなもので、壁の一部が張り出して庇を作り、横を低木や草木が程よく囲っていることからそう呼ぶ。だがその壁も古く、あらかた崩れ中の骨組みが露わになっており、日の光は強すぎず弱すぎずで届く。その下に机と棚があり、薬瓶や乾燥させた薬草、図本等が決して整然とは言えない様子で収められている。その外には小ぶりの木の卓と椅子が二つほど置いてある。

ランシャはその棚から茶器を出すと、幾種類かの薬草と茶の葉を入れた。それを置くと、机の端にある小さな炉に乗せられた水器を持ち上げる。湯を茶器に注ぎ、陶器の杯を用意する。その間に、客をもてなす甘味を皿によそった。そしてまた茶器を持ち上げ、杯に注ぎ入れる。何とも言い表しようのない香りが立ち上った。

「どうぞ」

杯と菓子皿の載せられた盆を差し出される。軒先に出してある椅子に座っていたクラディアンは、有り難く受け取った。

「今日の効能は？」

ランシャの作る薬茶は、いつも異なる。薬草の配合や蒸らし時間によって得られる効果が違うのだという。

「今日は、主に疲労回復です。疲れを取り、活力を生み出します。後で御就寝用に短時間でもよく眠れるような成分を加えたものをご用意します。……幾らか苦いと思いますが、茶菓子で和らげてくださいね」

そう解説して卓に盆を置いて先に杯に口を付ける。それは城に仕える者故である。臣下の中にも、敵国の密偵や背信を企む輩がいなくても限らない。幸い今まで生命の危機に晒されるようなことは避けられてきたが、王と二人きり、そして口に物を含ませるということは大変な責任を伴う。薬師になる為に厳しい試験を通り抜け、命を懸けた忠誠を誓っていても、そればかりは課せられた義務として強要されていた。王自身は、ランシャにはそのような疑いは決してかけられるようなものではないと主張していても。

だからこそ、ランシャは最大限の注意を払わなくてはいけないのである。たとえ周りに他の臣下のいない時であってさえ、王に忠誠を見せるため、いらぬ疑いを持たれぬために。この行為は、王を守ると同時に宮廷薬師の身を守ることにもなるのだと、クラディアンは日々この行為を見る度、物悲しい気持ちを抱くのだった。

第1話

茶は確かに苦みがあったが、飲み慣れているおかげで一息に飲むことができた。一度、重い風邪を引いたときは相当に苦いものを飲まされて、以後風邪は引くものかと思ったものだ。その時もランシャは同じものを先に飲んだのだが、顔色を変えなかったのに驚嘆したことを未だに覚えている。

「何か、要り用のものはあるかい」

一瞬、ランシャは唐突な問いかけに詰まったが、しばし考える表情になる。薬師の仕事に必要なものは、適宜城から渡されている。薬師の方から要望を伝えることもあれば、こうして城の方から聞きに来る時もある。

「そうですね……薬草の種は今植えられるものはないですから、特に必要ではありません。地下室に入れている草でそろそろ薬を作ろうと思うので、鉱石を少しばかり用意していただけると助かります。薄紙に書いておきますね。石工の方に渡してくださると助かります。後で私が自分で行こうと考えていたのですが……」

「執務室に戻る前に伝えておくよ」

クラディアンは、民や謁見に来る商人や他国の使者には威厳ある王としての態度を示すが、それ以外の城内ではあまり王らしい振る舞いをする事は少ない。もちろん、重臣たちとの会議には真剣に臨み、執務も滞りなくこなす。しかし、それ以外は堅苦しい生活を嫌い、料理人や庭師、従者たちにも分け隔てなく接する。そのさまが噂で民衆へ流れてもいるので、彼の王としての評判は他国と比べても劣らないばかりか、むしろ上を行くだろう。

「そういえば、また外出許可を取らなかったそうだね。外の空気を吸ってこなくていいのかい？」

そう話しかけると、ランシャはやや頬を赤らめた。城専属の薬師は、十数日に一度城の外に出ることを許されている。市で掘り出し物を買ったり、知り合いに挨拶をしたりと、城ではできないことをするためにあるものだ。しかし、ランシャが専属薬師になってからそれなりの年月がたっているが、それを使ったのは数えるほどしかない。

「すみません、あまり城の外に用がないもので……」

「謝ることはないさ、仕事が忙しくて外に行く暇がないのかと思っただけだから」

首を振ってランシャは理由を話した。

「外に行く暇もないほど忙しいのではありませんが、城で必要なものはそろいますから。それに私は人ごみが少し苦手なんです。下手をすると迷子になりますし」

「衛兵が付いていてくれるだろう？」

「それもあまり好きではないんです。わざわざお手を煩わせるようで……。私には家族も特に親しい人も城外にはいませんから、時々城の裏の森に行くだけで十分なんです。ここが一番心地良いのです」

外出許可と言っても、薬師一人で外に出られるわけではない。必ず二人の衛兵が市民に扮して警護する決まりになっている。薬師の顔が市民に広まっているわけではない。しかし万一誘拐の被害に遭った場合、もしくは背信行為に走った場合。どちらにしても国への重大な損害に変わり

ないからこそその致し方ない措置である。薬師は癒しの術に長けているが、反対に攻防の術はほとんど持たないのが常である。魔法力を持たない薬師は連れ去られるのに抵抗らしい抵抗も出来ないだろうし、後者であれば逃げおおせることはできない。

ここまで用心が過ぎるのは、王宮の薬師であるがために他ならない。王の命を握る人物であり、国で最も秀でた治癒の術を持つ者であるが故。王専属の薬師には、代々義務という名の重い鎖が巻かれていた。

「まあ、そうなら良かった。時々、君が窮屈な思いをしているのではないかと思っていたからね」

「そんなことは全くないです」

薬師はにっこりと笑う。

「それに私は高い所が好きですから、ここは私にとって聖域なんです」

そう、ランシャがいるのは、城の敷地内にある作物畑と同じところにあるのではない。城の最上階に、透明な硝子でできた半球がある。その下は一面の緑とちらほらと鮮やかな花々の色。そこが代々の薬師の仕事場であった。

第1話

荒々しい足音が聞こえてきたかと思うと、大臣の声が聞こえてきた。

「陛下、このようなところにいたのですか。先程の会議をまとめるために執務室にお戻りいただけますか」

二人の前に現れたのは、まだ三十前後と見受けられる男だった。やや太い眉を上げ、肩を怒らせている。彼は、大臣の一人、アンロック・デルイである。仕事ぶりは有能なのだが、熱血漢なところがあり、しばしば他の大臣と衝突することもある。彼は衛兵の出身であり、担当は国内の治安維持や城内警備だった。衛兵長も兼任しており、最も主君に対して忠義が厚い男の一人だと言われていた。アンロックは、王の絶大な信頼を得ているランシャを快くは思っていないようだった。しかし、王の薬師とあっては――階級は宮廷薬師の方が高い――跪くことはできて面と向かって批判することは許されない。今日も、彼はランシャが王の持っている器に入っている薬茶を共に飲んでいることを抜け目なく確かめると、一瞬苦々しい睨みを聞かせて王に向き合った。

「さ、お早く。記録が終わった後は隣国からの使者との謁見です」

「分かった分かった。そう急かすな」

クラディアンは苦笑いをすると、椅子から立ち上がった。「ランシャ、茶をありがとう」

「いいえ。あまり無理をなされませんよう」

アンロックは既に王宮の廊下へと続く入り口へ向かっている。彼が振り向く前に、クラディアンはランシャに頭を近づけ、小さな声で話した。

「あまり彼の態度を気にしてはいけないよ。ただ君が彼にできないことができ、つけない立場にいることに純粋な不満を抱いているだけだ、軽く受け流せばいい。それでは、また来る。薬を頼むよ」

ランシャは、そう励まされたことに驚いてクラディアンを真正面から見つめた。彼は、うっすらと口に笑みを浮かべてもう何も言わなかった。大臣が振り向く前に身体を離し、足早に楽園を去った。入り口で追いつくのを待っていたアンロックと、何かを談義しながら姿が見えなくなる。

「……もうそろそろですね」

手を伸ばして、掌の上に載せた青い輝きを転がす。蕾は暗闇の中で淡く蒼い輝きをまき散らした。

――ここは、薬師の“地下室”。闇の中で育ちやすい草花や、環境の違いによって異なる効能を生む植物が管理されている。壁は、土ではなく岩石を積み上げたような作りになっている。その所々にくぼみがあり、ランシャはそこにも薬草を植えて育てている。空気が流れにくく壁には常に湿り気があり、ここで育てる植物にとって都合が良く、水をやる必要もほとんどなかった。また温度も一年を通して大きな変化はなく、夏季の暑さに我慢が出来なくなると、ランシャはよくこ

の地下室に避難した。

「水に濡れなければ良いのですが.....運に頼るしかありませんね」

口元に手を当てての独り言は熱心に植物の様子を見ている時の無意識の癖だ。本人は思っていることをそのまま言葉にしていると意識してすらいない。

足元に置いていた洋燈を持ち上げて出口へ戻る。地下室の奥の壁に岩と土で造られたやや歪な階段が伸びている。足音を響かせながらそれを上ると、天井が低くなっていく。頭に付きそうなほどになると、ランシャは洋燈を上を持ち直した。木の板が炎に照らされる。それは、取っ手の付いた木戸である。大して重くはないそれを持ち上げると、軋んだ音をたてて難なく開いた。

床の上に身体を移すと、木戸を慎重に閉めていく。長い月日に木枠が歪んでしまい、開けるのは簡単でも上手くしないといつまでも嵌まってくれないのだ。

何とか言うことを聞いてくれた木戸に背を向け、薬師は狭い部屋を出た。その戸も木戸ではあるが、こちらの方は一度も閉まらなかったということはない。

しばらく暗い中にいて目が太陽の光に慣れず、外界の眩さに目を瞬かせる。

――陛下は今頃、隣国との謁見でしょうか

ランシャはそんなことをふと考えた。

第2話

「グラギオンからの使者は代わったのか？」

クラディアンは眉を顰めながら、前方に跪く男に問うた。

「陛下。私は代理の者にございます。デガルはこの度病を患いました。重いものではありませんが陛下の御前に出て病を移すようなことがあれば、一大事。今回のみ私が遣わされた次第でございます。次からは元の通り、彼が使わされるでしょう」

頭を下げた彼に王は頷いて表情を緩ませぬまま、つと息を吐いた。

「病？あのデガルが病にかかるような男ではないと思うがな。まあ良い。国の密命でも負ってれば、そうとでも言うほかあるまい」

使者が僅かに体を動かしたが、クラディアンは追求せずに謁見の内容を伝えるように促した。他国の秘匿を窺い知れば、いらぬ争いの種を蒔くことになる。脅せば口を割るかもしれなかったが、その後の面倒を考えると得策とは思えなかった。

ものが切れそうな鋭い視線を思い浮かべる。他国の王の前に跪いても、忠誠を誓うのは眼前にいる自分ではなく、彼の国にいる彼の主なのだということがひしひしと感じ取れる目をしていて。他の者であれば憤るかもしれなかったが、クラディアンはその強い意識を痛快にさえ思った。強国グラギオンからの使者は常にデガルだった。クラディアンが王位についてからしばらくして使者が変わり、それからデガル以外が来たことはない。それが不審だった。

それに彼の代わりの使者は、有望そうではあったがまだ若く、国の代表としての重荷にはまだ慣れていないようだった。単純に考えれば、年長の者が来てもおかしくはない。そのため先の問いが口をついて出た。

デガルは凄まじく有能だった。彼の素性は臣下に聞いたぐらいのことしか知らなかったが、実際に話し合うと、頭が切れるだけでなく様々な知識、情報を脳内に蓄えているのが感じ取れた。決して自国に不利な契約は取り付けない、隙のない男だった。グラギオン王国の主、ベルヴォルフもさぞかし重宝していることであろう。有能なだけでなく、その強さにかけても国内で最強であるという噂を聞いたことがある。真偽のほどは分からないが、国の背に聳える険しい岩山に住む怪物を一人で倒したという。それを抜きにしても剣技、魔法どちらにも優れているのは見れば分かった。つまり、非の打ち所がない男なのである。強いて言えば、眼光が強すぎてあまり人付き合いが円滑に行えないのではないかということぐらいである。

代理の使者が伝える取引に関する事項を聞きながら、クラディアンはそのようなことを考えていた。

――王は、もう少し深く考えるべきだったのだ。この時感じた疑問を、掘り下げるべきだった。彼と信頼関係が築かれていないことを王は失念していた。クラディアンは、一国の主として国のことを一番に思うがあまりに、猜疑の芽を自ら摘んだ。デガルは、エンディウス国内にいた。そして、人知れず城内に侵入していたのだ――自らの主に必要なものを得るために。

第2話

王に渡す薬を調合したのち、人を呼んで畑全体の水やりをしてもらった。薬草畑はそれなりに広いので、ランシャー人の手には負えないのだ。このところ快晴が続き、夏が来る前に回数が二度に増える日が来るかもしれなかった。休憩を取ることにする。といっても、やることはあるので身体を大して動かさない仕事をすることになる。クラディアンには多忙ではないと言ったが、実際はそうでもなく、王への献上薬だけでなく、王宮のなかで必要とされる薬品は全てランシャが担っていた。だが、城の外に興味がないと言ったのは嘘ではない。自分と血のつながった人物は城内外含めていない。親しくしている人もいない。特に夢中になっている収集品があるわけでもない。わざわざ城の者の手を煩わせてまで、生活圈となっている城から出る理由が自分には存在しないことを良く分かっていた。王宮内の様々な制約や義務にささやかな煩雑さを感じることはあっても、息苦しさを覚えたことはない。城での生活は何不自由なく、十分に満足できるものである。

年が変わってからつけていた帳簿に新しく作った薬名と効能、材料を綴っていく。

ここでは春が一年の始まりである。一年は八つに分割され四つの季節から成り立っている。遠くにある国は同じか知らないが、周辺国は同様の暦を使用していた。今は二の月で、農業地の植え付けは終わり、育った苗が徐々に背を伸ばし、青みを濃くしていくのが遠目に見える。

透明な半球体にはいくつか開く箇所があり、朝からそこを開け放している所以風が良く通る。庭園には、風の声と洋墨が紙をこする音だけが存在していた。たまに、上空を飛び過ぎる鳥が高らかに鳴くのが耳に届いた。

あらかた書き終わったところで筆を止め、うっすらとした眠気を払うために伸びをした。日はまだ高かったが、幾らか傾いている。これから夏にかけて日照時間は長くなっていき、薬草の管理も注意深く行わなくてはならない。薬師にとって一番厄介な季節は冬ではなく夏である。確かに冬も霜や地面の凍結で被害を受けることも少なくない。しかし、冬は育てられる種類が少なく、秋までに収穫したものを薬にしておくか、乾燥して取っておくことがほとんどでそう深刻なものではなかった。植物にとって天敵なのは、彼らにとって必要不可欠な水分を奪い去り、鮮烈なまでの日光を浴びせる夏季なのである。だが、一番植物が成長できるのもこの時期であり、したがって薬師だけでなく農民達もいかにして自分たちの作物を傷付けずに生育させるかを追求しているのだ。

ランシャは、今年庭園に細い水路を張り巡らせることを考えていた。しかし、そう簡単にできるものではないので自分で考えるだけでなく王に許可をもらわなくてはならない。そちらの方はおそらく問題ないとしても、重視しなければならないのは大切な薬草である。下手に大きな工事をする事になれば、ここに育っている植物たちが少なからぬ影響を受けてしまい、最悪の場合枯れ果てる。それは何としても避けなくてはならない。また、水路に流す水の問題もある。どのような工程を行うかも思案しておくべきだ。と、歩きながら思考していたランシャは自分の見落

としに気づいた。魔法を使ってもらえばよいのである。そうすればいま思いついた問題点は完全にはないが解消する。あとは自分がその穴埋めをしていけばよい。ある程度考えがまとまったところで、許可を請う前に自分の提案を王に伝えておく必要があるそうだった。

薬師にありがちなことだが彼らは自分達が魔法を使えないため、根本的に考えや行動に魔法を使うという選択肢がない。王に相談すればすぐにその点を指摘してもらえただろうが、ランシャが早々にそのことに気が付いたのは正解で、もしそれがなければ問題が山積みの計画を前に一人で右往左往することになったかも知れなかった。

立ち上がって、畑を見て回る。そうしているうちに、料理長にも薬を届けなくてはならないことを思い出した。料理の材料として使えるものを思い浮かべて、それが随分端の方に植わっていることに思い至った。区画の間を縫う道を進む。端とは、そのまま城の端も指し、眼前には城下町と深い森の分かれ目が伸びているのが見える。

しばし森の木々の成長を観察していたランシャの目に、何かが動いたように見えた。それは、硝子の外ではなく背後を映したかららしいと気付いて後ろを振り返った。

第2話

「ど、どなたですか……」

驚きのあまり、出てきた声は少し震えていた。いつの間にか、気配もなく背後に人が忍び寄ってきていたのだから無理もない。もし薬草を先に採っていれば地面に落としていただろうと、頭の隅で些細なことを考える。

突然の訪問者は、ただ無表情で立っていた。鋭い視線がランシャを射る。

「あの……？」

もう一度訪ねようとする、目の前の男は口を開いた。

「俺の名はデガル。グラギオンの使者である」

不遜とも取れるその口調に、一切の感情は存在していなかった。寒風に正面から吹かれたかのようにランシャが顔を伏せる。

「グラギオンの使者様が……こんなところに何の御用でしょう」

姿勢を変えずに聞くが、冷たい声は返ってこなかった。不審に思って視線を上にあげると、デガルは薬草に覆われた庭園の方を見ていた。ランシャが惜しみなく育ててきた植物が、斜陽の中で橙に染まっている。

「そなたは優秀な薬師だと聞いた」

デガルの口が開く。

「エンディウスにおいて、かつてないほどの腕を持つと」

ランシャは瞬きをいくつか繰り返して、顔を朱に染めさらに低く下げる。身に余る言葉だと思ったからだ。

「ま、まだまだ未熟な腕です。そんな評価が受けられるほどの……」

首を振って否定しようとする。ランシャは褒められることに慣れていない。褒められたことが少ないというわけではないのだが、誰に言われても同様の反応をした。

しかし、ランシャの声は、デガルにはほとんど届いていないようだった。先ほどから後方に首を回したまま、どこを見ているのか分からない。それにまだ、ここを訪れた目的さえ定かではない。

「そなたは、どれほどの忠誠を自らの主に誓う？」

唐突な問い。これがこの男の喋り方なのだろうかと言いつつも、ランシャは顔を上げ、背筋を伸ばして答えていた。グラギオンの使者を前にした身体のこわばりが解れていく。

「私のこの心身共にあの方のものです。私はクラディアン陛下に何かあれば、命に代えてもこの手でお救いしたいと考えています」

デガルが振り向く。その視線を、ランシャは受け止めた。

「ここに何用ですか、デガル様」

――凜とした声で、薬師は問う。

第2話

ふ、とデガルが笑みを浮かべた。思いもよらない表情に、ランシャは戸惑う。と、同時に何か嫌な予感も感じた。何かを含んだ微笑ではないはずなのに、無意識に半歩後ずさりしていた。

「そこまでの忠義を抱くなら、寝返れと言っても無理な話だな」

「なっ……」

本気か一瞬分からなかった。しかし受け取る印象に基づいて考える限り、この男が下手な冗談を言うようには見えなかった。

「私に背信を打診しに来たのですか？」

「まずは、な」

意味を捉えられない返答に、ランシャの眉が寄る。

「だが、命をかける覚悟までしているのなら愚問だったな。やはりさっさとすべきだった。俺らしくもない手間をかけたものだ」

デガルが一步進む。最早視線はランシャに向けられて逸れることはない。獣に対峙したような錯覚を抱いてまた少し後ろに下がる。戦場に立ったことも、命の危険に晒されたこともないランシャは、それがデガルから発される殺気のせいだとは気付かない。

「そなたには悪いが、グラギオンまで来てもらおう。抵抗しなければ下手に傷つけることはない」

瞳の冷たさが増した。背には温かな陽を感じているのに、寒気を感じる。動悸が速くなり、呼吸が浅くなる。声が震えないようにするのが精いっぱいだった。

「何の為ですか。そちらにも……グラギオンにも薬師はいるでしょう」

「然り。グラギオンの薬師になれと言っているわけではない」

まるで空を掴むような問答である。デガルがもう一步を踏み出す。三度下がろうとしたランシャの背に、硝子の硬い感触が伝わった。追い詰められてしまった。そう感じた。だが視線を外さず足に力を込める。

「もう一度言う。大人しくグラギオンへ来い」

「嫌です!」

叫ぶように答えて、横に駆けた。不意を突かれたデガルが伸ばした手は上着だけを掴んだ。やや大きく作られていたそれはするりと脱げ、ランシャは入り口—今まで立っていた場所とは半球体の反対にある—へ必死に走っていた。入り口は扉が占められているが、その外には衛兵が待機しているはずである。

しかし、半分も行かぬうちにランシャの身体は後ろに強く引かれ、小道の上に引き倒された。背を打って息が一瞬詰まる。いつの間にか両腕は使者の足で固定されてしまっていた。身を振っても少しも動かない。上半身が自由なデガルは、片手でランシャの顔を上に向けさせる。

「衛兵に助けを求めても無駄だ。立ったまま気絶しているからな」

ランシャは息をのんだ。その言葉は本当だろう。既にグラギオン王国最強と謳われる彼について、クラディアンから聞いた話を思い出していた。もう、逃げる術はないのだろうということも。それでも足掻かないわけにはいかなかった。だが、どうやってもデガルの拘束は解けな

った。

「ここですか。まだ謁見は時間がかかるだろうからな」

デガルは腰に括り付けた皮袋から、小さな小瓶を取り出した。中で緑がかった薄い色の液体が揺れている。それが何か分かったランシャの顔が引きつった。

第3話

「……そ、それは。……や、止めてください……」

視線は小瓶に縫い付けられている。中の液体は、取り出した反動で未だに表面に小さな波を立てていた。

「一目見てわかるか。やはり、才能は確からしい」

首を左右に振って顎を捉える手を振り払おうとするが、それさえも許されない。栓が開けられ、小瓶が口元に運ばれる。ランシャは、反射的に瞼と口を共に閉じる。唇が切れても開くまいと思った。

急に腕を押さえつける足に強い力が込められた。突如生じた激痛に、兵士が受けるような訓練を受けていないランシャは悲鳴を上げずにはいられない。

「うっ……あっ」

急いで唇を結ぼうとしても遅い。液体は口内に注がれ、零れた残りは頬を伝う。咽ようとして上手くいかずに、液体は体内へ侵入していった。喉を灼熱が襲う。

「―――っ」

身を襲う凄まじい刺激に悲鳴を上げるが、焼けた咽喉からは掠れた声しか出てこなかった。

しばらく身体を痙攣させて、ランシャの全身から力が抜けた。潤んだ瞳は薄く開かれ、息を荒く繰り返す。

「やはりか」

「……？」

最後まで理解できない言葉が聞こえてきた。ランシャは薄れていく意識の中で、主のことを想い、そして何故彼が自分を捕らえるのか不思議に思った。

「全く不思議だな」

デガルは呟いた。すでに身は起こしており、足元には気絶したランシャが横たわっている。健やかな寝顔とは言えないが、呼吸は安定している。見る限り後遺症も出ていない。

「本当に効かないのか」

ランシャに飲ませたのは劇薬である。飲めば、全身が焼かれるような感覚に苛まれたまま数瞬で絶命する。死体には赤黒い斑点が幾つも浮かび、やがてそこから腐敗していく。その毒名には、炎を意味する古代語がつかわれていた。薬師が作る中では一、二を争う強毒作用がある。それ故、薬師は慎重に調合する。材料の量を間違えれば、主成分である毒草の実が弾け、調合者を襲うからである。実だけでは絶命まではいかないが、それでも強力な毒素を持つ代物だ。

だがランシャの命は奪えなかった。それは、驚愕すべき事実である。あらゆる毒に耐性を有しているのだろう。もちろん、相応の苦痛は受けるらしいがそれだけである。体には何の変化も起こっていない。

「さて」

呟いて、軽いランシャの身体を軽々と肩に掛ける。

「クラディアン陛下、悪いがこの薬師は我が主、ベルヴォルフ様に献上させてもらう」

　　そう言い放つと、デガルの姿は掻き消えた。一陣の風と、それに吹き飛ばされた葉や花卉が後に残された。

第3話

「ではこれにて失礼させていただきます」

時間も遅いので城に宿泊してはどうかと提案したのを丁重に断って、短髪の青年は退城の意を伝えた。

「ご苦労だった。デガル殿によろしく伝えておいてくれ」

グラギオンの使者は深く頭を下げて謁見の間を出ていった。流石に緊張の為か最後は疲労が薄く出ていた。

城の玄関口を固める兵が労いの言葉をかけて来るのに会釈を返し、青年は帰りを待っていた馬車に軽々と乗り込んだ。グラギオンの馬車は、豪華な装飾はないが頑丈に作られているのが良く分かる。それはそのまま国風を示していた。グラギオンは緑豊かなエンディウスとは逆に険しい岩の国である。高さは様々だが、硬い岩石でできた丘や小山が点在しているのだ。深い谷間も多く、間を縫うようにして激流の川が流れている。毎年何人もが足を滑らせるなどして命を落とす。獣に襲われるものもいる。岩山に隠れるようにして大小多くの獣が住み着いているのだ。人も獣も日々弱肉強食の世界に生きている。緑少ないその国土はそこに住む人間の性格にも影響を及ぼし、グラギオンの民は皆体力があり、自己にも他者にも厳しい。

馬車が出すように言われてゆっくりと動き出し、城門へと向かう。エンディウス国王の前では毅然とした態度を心がけていた彼はその中で、不安げな顔をしていた。彼が請け負った仕事に対して何か失敗したことに気が付いたというわけではない。強いて言えば、最初に王に密命の可能性を言い当てられたことに対する反応は鍛錬が足らなかったとは思っていたが、王は深く聞いてこなかった。先に中にいるだろうと思った人物がいなかったことが、彼にその表情をさせているのだ。

「待たせたな」

その時、頭上から声がしたかと思うと、目の前に風が吹き、その隙間から人影が現れた。

「伝えたとおりにしたな」

「デガル様！……心配致しました」

実際に青年の顔には安堵が浮かんでいる。万一、デガルが捕えられればその後のことは想像もできない。両国間の信頼を一方的に打ち切るようなことをしでかしているのだ。二人の死罪では終息しないだろう。今進めていることは、戦争の種に水をまいているようなものなのだ。

「すまなかったな。よくやってくれた」

青年は武人流の座礼をして応えた。

「もったいないお言葉、痛み入ります。首尾はいかがでしたか。無事に薬師を捕える事が出来たのですね」

「ああ。この者が城内から居なくなったことに気が付くにはまだ時間がかかるだろう。だが、時間稼ぎは大して意味を持たないだろうな。恐らく今日中には発覚するに違いない」

デガルの腕の中には、華奢な体躯が収まっていた。先ほどよりは静かな寝顔をしている。

「随分と若いですね。それに、珍しい毛色をしています」

覗き込んで青年が言う。

「ああ、俺も見たことがない。……魔法を少しかけておく。途中で目を覚まされると面倒だ。お前は少し休んでおけ。慣れないことをして疲れたろう。王国に戻るのは明日の夜明け頃だ」

そう言うと、デガルは小窓から外を垣間見た。硝子の向こう側には、暗い夜とそれに対抗する星の姿が見える。まだ新月ではないはずだが、小さく切り取られた空に月を見ることは叶わなかった。

第3話

「やっと終わったか……」

クラディアンは椅子から腰を上げて息をはいた。代理の使者は、デガルの代わりを任されたとあって特に問題もなく任務をこなしたが、今回は報告することが多かったのに加えて、輸出入の物品の目録を渡され内容を吟味しなければならなかった。返事はすぐに用意せず、読んですぐ分かる範囲のことを訊く。そして半月後の謁見で追加要望や質疑を確定して輸入を依頼するのだ。

肥沃な土地柄のエンディウス王国とは異なり、グラギオンではあまり農耕は行われぬ。植物が全くないわけではないが、乾燥した空気であり雨が降らず、結果として限られた種類しか作物を育てられないのだ。代わりに、鉄鋼の材料となる岩石が豊富に出てきた。水晶等の鉱石も少なからず採れる。エンディウスは作物や家畜、グラギオンは加工・未加工を問わず鉱物資源を主に輸出入していた。王宮の硝子は殆ど全てがグラギオンからの輸入によるものだ。彼の国の加工技術は高く、しばしば素晴らしい装飾の品々が親交の証に贈られてきた。残念ながら、身を飾らないクラディアンの役に立つことは少なかったが。

今日の謁見は普段よりも大幅に時間を喰ってしまったが、通常の執務に追われていたわけではないのが幸いした。やるべき公務はもちろん多いが、今の時期は国民の謁見以外はあらかじめ話を聞いていた事項の許可承認や確認が主だった。もう日も暮れ、この後は謁見も会議もない。

「陛下」

アンロックが謁見記録簿を片手に戻ってくる。先ほどまで、エンディウスの馬車を見送っていたのだ。

「分かってるさ。後は書類の山と格闘だ。格闘と言え、夕食が終わったら腹ごなしに剣技の稽古に付き合え、アンロック」

身体を伸ばしながらそう誘うと、アンロックは快諾した。

部屋へ戻ろうとすると、反対側から城で働く少年が早足で近づいてきた。俯きがちで、不安げな顔をしている。随分と近くに来てから漸く二人に気が付いて立ち止り、深く頭を下げて非礼をわびる。

クラディアンは、彼が厨房付きの侍従だったことを思い出した。まだ十を過ぎたばかりだったはずだ。

「何事だ？」

アンロックが王の前に出てそう聞く。少年は、眉を曇らせたまま少し躊躇して口を開いた。「薬師様がいらっしゃらないのです。料理長に言われて、薬草を受け取りに行ったら誰も居ませんでした」

「ランシャ殿が？」

訝しげな声を上げて、大臣が聞き返す。少年ははい、と首を縦に振った。クラディアンは嫌な予感がした。少年の不安が伝染したのかもしれない。

「地下室にいるのではないか？」

そうしてみると、少年は知らない様子だった。自分が付いていくことを提案すると、アンロックに止められた。

「陛下が直々に行くこともありますまい。私がこの少年と共に見てきましょう。陛下は先に執務室へ。後でご報告致します」

その表情に、煩わしさがありありと見えたのは言うまでもない。

「……」

腕の中にあった身体が身じろぎし、デガルは目を開けた。魔法が解けたのかと案じたが、そんな心配は必要なく、目が覚めた気配はなかった。夢でも見ているのだろう。

長い座席で隣に横たえるでもなく抱えているのは、馬車の振動で魔法の効果が薄れることがないようにするのと、下手に落ちて傷がつくことがないようにするためだった。今はまだ平原を抜けている最中だったが、そのうち石や坂が多くなっていく。稀有な存在であることが判明した今、自国に戻るまで少したりとも損なわないことがまず第一だ。

隣国と言っても、その距離は半日はかかる。しかし、他国と言え点する小国はさらに遠いところにあり、またエンディウス王国ほどの魅力や力もなかった。わざわざ赴く理由もなく、交易などないに等しい。お互い損もなければ益もない関係であり、ほとんど存在を無視している状態だった。そういう位置にあって、争いが起きたことはなかった。エンディウスとはかつて臨戦態勢を取ったこともあると記録には残っていたが、大きな戦闘もなく、現在に至っては良好な関係を築けている。

だが、それも直に終わるのだろう。王専属の宮中薬師を拉致したとなれば、関係の悪化どころか戦の勃発につながるだろう。あの王は、無用な戦いは避ける男ではあるだろうが、それでも自分の命を預けているものを奪われて何も言ってこないはずがない。グラギオン王国からの使者が代理を用意し、その日のうちに薬師が行方不明になった。関連付けない方がおかしい。

何故謁見の日と同時に誘拐を決行したのか。行くはずのない日に王国の近くまで行き、魔法を使って空間移動を行い、グラギオンに容疑がかからないように盗んで来るという考えもなくはない。しかし、そうしなかったのはそれがデガルの力を持ってしても実行不可能だったからだ。

強い魔法力を抱える国は、当然国の防衛にもそれを用いる。たとえ長い間、争いに巻き込まれなかったとしても、それを怠るようではその国の未来は見えている。エンディウス王国は豊穡の神の加護を受けているために余計に気を張っているのだろう。いつどんなことがあるか知れない以上、防護策を設けるのは当然のことだ。――いくら周りに敵対国がないとは言っても、隣には強大な力を持つグラギオン王国があるのだから。

国土は周壁に囲まれている。そう高く聳えるものではないのだが、その境界線に防衛機能が張り巡らされている。下手に魔法を使用すれば感知され、警鐘が鳴らされる。外から単身侵入しようとしても同じことだろう。厄介な代物だった。しかも等間隔に見張り台が立ち、すぐに兵が駆けつけられるようになっている。安穩とした日常の為に、深夜なら眠り込む者もいて対応が遅れると思うかもしれない。だがそれは大きな間違いだ。エンディウスの兵がよく訓練されていることは、以前指導を拝見したことで身に染みていた。強国と自負するグラギオンに劣るとも勝らない。兵士たちの目を見れば分かる。彼らには武人としての誇りが満ちていた。それは、険しいばかりの自国の兵にはそう簡単に見出せるものではない。また、実力があることも全体の動きから察した。

もし今、両国が全力を賭して争うとなれば、お互いにただでは済まない。場合によっては共倒れになる。そんなことはクラディアンも良く分かっているだろう。グラギオンが薬師に手を出し

たというそれだけで、全面戦争に持ち込むとは考えられない。

——そろそろ薬師の姿が見えないことが知れる頃。すぐに嫌疑を露わにしてくることはないだろう。どう出てくるか……。

長い夜は、まだ明けない。

第1話

王の執務室。大きな窓からは、少し前に地平線から浮き上がった太陽からの光が差している。書類や壁一面を占める本棚から引き出された様々な記録が、床や文机の上に積み上がっている。空中を漂う微粒な埃が、その間を飛び交い、日光を浴びて踊る。いつもと変わらぬ朝だ。

王が朝早くからここにいることは少ない。したがってクラディアンが夜も明けきらぬうちから執務室にいたというのは、今までないことだった。一晩眠らなかつたのが分かる赤い目で机に坐している。何度も髪を掻き上げたのか、頭髪は乱れていた。表情は真剣そのものであり、一種の気迫がそこにはあった。

ふいに、齒を食いしばり、何かに耐えるような顔をしてクラディアンは俯いた。拳が込められた力のあまり震えている。

「ランシャ……」

苦悶を顔に浮かべ、叫びだしたいのを押し殺してその場にいない者の名を呼んだ。

「陛下、薬師殿は地下室にもご在室ではないようです」

昨夜、しばらくして最上階から戻ってきたアンロックは心なしか蒼ざめながら報告した。その時ひたすら書類に調印していたクラディアンはそれを見て、己が感じた予感が決して錯覚ではなかつたのだと悟った。腕を止め、立ち上がり静かに命令した。

「状況を説明しろ」

弾かれたようにアンロックが背筋を伸ばす。告げられた事実を、クラディアンは全力で否定したかった。

――薬草畑に通じる唯一の廊下を警護する衛兵に声を掛けると反応がなく、訝しんだアンロックが一人の肩を揺らすと膝から崩れ落ちた。彼らは、二人とも立ったまま意識がなかつたのだ。彼は二人が息絶えているのではないかと思ったが、息をしていることからそうではないと知れた。

いくら声を荒げ、体を揺すっても彼らの意識は戻らなかつた。とにかく医師を呼ぼうと、悲鳴を上げたきり震えている少年を叱咤し使いに走らせた。

医師が来るまでの間、異常を察知したアンロックは薄暗い庭園内に入った。灯はなく、月星の光だけが中を照らしている。地下室に続く小さなひと間にだけ洋燈の用意があるが、見た限り”洞窟”の奥から光は漏れてこない。足音をさせないように慎重に近付く。人の気配はまるでない。木の戸に手を掛け、呼吸を整え一気に開いて中に躍り出る。半ば予想した通り、そこは暗いばかりでしばらく人がいなかった様子ですらある。腰に下げた携帯用の小さな洋燈を灯すと、炎は激しく動いて空気の動きがあることを示した。半球の通気用窓が閉められていないのだろう。ランシャの警護をした経験のあるアンロックには、夏季以外日が暮れば閉められる窓が開け放されたままなのは薬師の不在を確信するものにしかならなかつた。

地下室にも誰も居ない。ランシャがどこかに倒れていることも危惧したが、広い庭園内に魔法を使っても発見できなかつた。廊下に出てすぐの居室も除いてみたが、こちらも収穫はなかつた

。そうこうしているうちに医師が付き、二人の兵を見て単に深く眠り込んでいるだけだと診察して、連れてきた他の兵に宿舎へ運ばせた。アンロックは手持無沙汰な少年を厨房へ連れて行き、薬草を受け渡せなかったことを料理長に詫びた。薬師殿は気分が優れず、届けるのは回復してからにしてほしいと。料理長は少し疑問に思ったようだったが、何も訊かずに了承してくれた。

それから今朝まで、秘密裏に捜索が続けられた。アンロックを含めた大臣や執事が体を休めるように言ったが、王は頑として寝なかった。寝つけないとわかっていたからである。ランシャが昼過ぎに用意したらしき薬茶が発見されたが、結局飲まれなかった。

部屋の扉が叩かれ、衛兵隊長が入って来た。

第1話

「やはり、見つかりません。……無礼を申し上げますが、最悪の場合を想定された方がいいかと」

彼も疲れ果てていた。他の大臣には知らせないという指令のもと、夜通し駆け回って探索を行ったのだ。

ランシャ自身が望んで姿を消したとも考えられたが、姿が見られていなかった時間はそう長くなく、魔法を使えないが故に長距離移動が出来たとは思わない。仮に協力者がいても国外に逃亡することはまず不可能であり、その前に廊下の兵を気絶させるようなことを許すはずがないというのが王の主張であった。ランシャがこの城に来てから王に忠誠を誓って誠心誠意働いていたのはアンロックでさえも認める所である。

謀反の可能性は完全に黙殺されたわけではなかったが、その可能性はほとんど皆無であると思われた。

そうなれば、無理矢理に攫われたことになる。しかも、犯人はこの国の民ではない。城の外にも薬師はおり、その薬代や診療代は決して高値ではない。攫って金銭を要求するほど困っているのであれば、まず国に相談をすればよい。調べを受けた後、しかるべき措置が取られることになっているからだ。民草が誘拐する動機は極めて低い。それも、わざわざ最上階に住まう薬師だけを攫うのは決して容易いことではない。そしてまた、よく訓練された兵を気絶させられるわけがないという問題が浮上してくるのだ。

ランシャを攫ったのはエンディウス王国の兵と魔法を欺く腕と思考を持った相当の手練れである。そして、もう一つ考えるべき重大な事実がある。

グラギオン国使者のデガルが謁見に姿を現さず、代理の者が去った後にランシャの行方が知れなくなったこと。

薬師失踪とこのことを併せれば、グラギオンがランシャの腕故に連れ去ったと考えてもおかしくはない。また、デガルがいたとするならば、ランシャが以前からグラギオンと通じ、ついに寝返ったとも考えられる。後者を完全にないとするのができないのは、デガルという男があまりにも優秀であるからだ。だがクラディアンは断固としてこの推測を打ち消そうとした。

アンロックの報告を聞き終えた王は、悔しげに齒を食いしばってからこう言った。

「ベルヴォルフと話をする」

王直々に赴くのではない。魔法を用いて、会談を行うのだ。これは緊急用に取り決められた方法でもある。

「盆を用意せよ」

第1話

「全ての予定を遅らせてグラギオンと連絡を取り、事実確認をする。それが終わるまで、誰も入れるな」

そう告げられ、ある意味執務室から追い出されたアンロックの疲労が溜まった体の内では、様々な考えと気持ちが混じっていた。

薬師が無理矢理に拉致されたことを、大臣は確信していた。いくら王の信頼を得、自分よりも遙かに強いつながりを持っていることが気に入らなくとも、薬師としての力量や主への忠誠の固さを疑うことはアンロックはとうの昔に止めたのだ。彼は武人の誇り高さから、単なる私情で人間判断を誤ることはしない男だった。したがって、背信には懷疑を抱いている。だが報告では己の気持ち云々ではなく、状況と、事態が事態なだけにそれが起こった考えられる限りのあらゆる原因や可能性も連ねなければならなかった。

ランシャがもし今まで比較的友好的な関係を築けていたグラギオンに誘拐されたとなれば、相手の国が他国の薬師を用いて何をしようとしているのかを知ることがまず第一であるが、思い浮かべられるようなことは少ない。ランシャ自身の能力に目を止めた彼の国がなにがしかの目的を達成するべく実行したのだろう、としか。

腕前は既に知られている。一年に一度、王が互いの国を訪問する風習が古来よりある。秋の終わりに、両国の関係維持を約束し、お互いの繁栄を願うのだ。その時、ランシャは夕食後の会談で二人の王に最高の薬茶を振る舞った。エンディウス国王クラディアンは毒味はアンロック、その後でグラギオン国王ベルヴォルフは毒味はデガルが行った。クラディアンはランシャについてそう多くを語らなかったが、彼の雰囲気から薬師の腕を十分に頼りにしていることは分かったはずだ。そして、一晚という短い滞在――王が国を開けられるのは、往復の距離を考えてもその程度である――の終わりに、グラギオン王は茶の礼を言う少しの間薬師を見ていた。ランシャは不思議そうな表情を浮かべつつも、秋の日差しを受けて葡萄色がちらつく瞳でその視線を避けることなく受け止めた。

だが、ベルヴォルフがエンディウス王国の宮廷薬師の力量を必要としても、攫ってまで何をしたいのかが全く見えてこなかった。単なる協力ではいけないこと、クラディアンには決して伝えられない目的――。

――分らないことを考えてばかりいても仕方がない。すべてはクラディアン様とベルヴォルフ様の談議にかかっている。グラギオン王国の態度如何では、長らくの親交を断ち、両国の戦争が勃発する。……そこまでいかずとも、関係が悪化することは避けられない。

悶々とした心情を抱えつつ、アンロックは声の漏れない厚い扉の前で立ち尽くしているしかできなかつた。

クラディアンは、巨大な水盆の前に立っていた。城の庭に飾られた両手で抱えられる程度のものではない。その円の直径は、彼の背丈ほどもあるだろう。高さもそれなりにあり、手前に数段の階段がある。盆の縁には古代語が刻まれ、胴には月や太陽、何か判別できないものが彫刻されていた。その中には、満々と透明な水が湛えられている。

王の手には、最低限の装飾が施された金細工が巻きつく硝子製の筒があった。器の中央に、拳ほどの水晶が入っていた。蛍石のような形をしているが、色は深い青であり、時折輝きを放つ。クラディアンは器を水上に掲げると、そのまま落とした。器が底に当たると、硝子が溶けた。金が巻き付くものを失い、今度は蛇のように動いて結晶と合体した。その反動で、水晶はくるくると回転を始める。

クラディアンが再び手を水盆の上に翳すと、自然なものではない光が水晶から発され始めた。鏡のように周りの景色を映し出し、それも輝きのうちに消え、やがて水面は何も写さなくなった。

「グラギオン王国、ベルヴォルフのもとへ繋げよ」

王の言葉に反応して水面がさざめき、執務室とは異なる風景が眼下に現れ始めた。

第2話

「どうだ、姫」

尋ねた。診るためにかがんでいた腰を何とか起こすと、老女は振り向いてデガルを見据えた。

「魔法酔いだね」

「魔法酔い……？」

初めて聞く言葉だった。姫は鼻をふんと鳴らして簡潔に説明する。

「術の程度に関わらず、吐き気や眩暈なんかを起こすことさ。私ら薬師は魔法の力を持たないからね、掛けられると体が必要以上に異常を感じて過剰反応してしまう。その結果がこれだ」

薬師の老女は、寝台の上を指した。そこには、魔法は既に切れているはずのランシャが苦しそうな表情で横たわっている。未だ意識は戻っていない。うっすらと汗をかき、吐き出される呼吸は浅く速く、熱い。

「ただ気絶させておけばよかったのさ。それを効率ばかり優先するから逆に遠回りになるんだ。この様子では回復を待つしかないね」

蓮っ葉な口調で淡々と言う。デガルは寝台を見たまま、口を開いた。

「時間はあまりない」

そう呟くと、姫は片眉を上げた。

「そんなことはあたしにゃ関係ないよ。あんたがどうにかしな。陛下には何と言ったのさ」

「まだ何も」

今度こそ、老女の目が見開かれた。微かな畏れと恐怖が横切る。

「あんた、正気かい？陛下に隠し事なんて、そう出来るもんじゃないよ」

「正気だ。そなたもそのつもりで頼む」

姫は心底煩わしそうな表情を浮かべ、また後ろを向いた。「知っている者は他にいるのかい」

「部下で知っているのはイラルカだけだ」

短髪の青年を思い浮かべる。物事を鋭く見つめる目と、賢い思考、強靱な体。まだ訓練兵の時、個人的に指導したこともある。若いがための未熟さはあるが、いずれ消えるだろう。弟子のような存在だ。彼にだけ今回のことを知らせ、薬師誘拐に加担させた。他言しないという確証あったのさ。

「そうだ、この子には薬は効かないよ。だから、通常よりも時間がかかるのさ。常人だったらあたしの薬を飲ませて半刻ほどで、回復させてやるけどね」

「毒が効かなければ、薬も効かないというわけか」

姫は首だけを回してにやりと笑った。

「その通りさ。よくそれでエンディウス王国の宮廷薬師になれたものだねえ。あんたに渡したやつは、そりゃあたしが調合する中で一番強力だから気絶までいったろうけど、普通の薬やちょっとした毒なんかじゃ何も感じないだろうよ。間違いなく国王は知るまいね」

デガルは想像する。薬と毒は表裏一体。薬も調合する量を間違えれば体に害となるものはざらにある。対して、毒もうまく使えば時として薬以上の効能が期待できるのだ。以前にこの老薬師

から聞いた話だ。とすれば、ランシャは自らが調合する薬を正確に把握することは難しい。理論詰めで何とかなってきたのかもしれないが、材料は仮にも自然物だ。常に同じとは限らない。王に飲ませるときは必ず自分が事前にでも含んだだろう。そして問題がないことを証明して王に献上するのだ。もし判別できていなかったとなれば、そしてそれが毒であったならば……。

しかし、ランシャは否定したがその腕前は薬師に格別興味を抱いていなかったデガルでさえ知るほどである。凜とした眼差しを思い浮かべる。あの時、纏う気配が一瞬にして澄んだ。躊躇うことなく自らの心身は主のものであると言い切った。それに仄かな感心を抱いたものだ。

どういうわけなのか。

ふと疑問を抱くが、無駄に使う時間などない。できるだけ王に知られずにことを進めたかった

。

第2話

水鏡が距離を超えて映し出した風景は、内装は異なってはいるが部屋の機能は同じ為か、少し雰囲気似ていた。その中に、一人の男が立って、こちらを不機嫌そうな顔で見つめている。むしろ睨んでいると言っても過言ではない。しかし、これがこの男の素の表情であり、そう知っているクラディアンは気にしない。

『久しいな。何の用だ、クラディアン。書類についてなら、半月後に質疑を受けることになっているはずだが』

「忙しいところ済まない。交易について聞きたいことがあるのではない。……貴公が我が国に送ったのは誰だ？」

水面で微妙に歪んだ世界の中でも相手が眉を顰めるのが分かった。

『言っている意味が分からない』

「貴公が先日送ったのは、デガルだったか確認したい」

『……他に誰がいる。気は確かか？ 貴公が直接会ったであろう。そのような些末なことを聞くためにわざわざ水盆を使うとは感心しない』

ますます眉間が寄せられる。今にも一方的に通信を切断されそうな気配だ。

「いや、私が接見したのはデガルではなかった。まだ若い青年であった。そして、彼が去った後、我が国の宮廷薬師が姿を消した。――何か心当たりはないか？」

沈黙が下りた。グラギオン国王のベルヴォルフは、腕を組んだまま厳しい顔つきで黙っている。クラディアンが暗に秘めた疑いを素早く理解したのだろう。

『貴公……貴公の言ったこと、虚偽ではあるまいな』

「もちろんだ。国に関わる重大な問題であるから、こうして直接確かめた。……デガルは今どこにいる？」

『今ここにはいない。先ほど帰還し、もうしばらくで報告がある。話をするか』

「いや、いないのならば良い。……ベルヴォルフ、気に障るであろうことを承知で言うが、貴公は何も指示していないのだな」

すると、グラギオン国王は顔を歪ませた。分かりにくいだが、笑っているのである。

『しているはずがないだろう。貴国の薬師がいかに優秀であろうとも、誘拐まがいのことをするはずがない。我が国の薬師も、高齢で貴国よりは多少劣るともしれんが、腕は良いからな。だが薬師の件は置くにしても、デガルが断りなしに任務を他の者にさせるとは些か気になる。私も確かめるべきであろうな』

クラディアンは、ひとまずベルヴォルフが一笑に付すことも、激怒することもなく耳を傾けてくれたことに安堵した。厳格なことで有名だが、グラギオンの王は決して無慈悲ではないのだ。

何か言う前に、ベルヴォルフが再び口を開く。

第2話

『こちら是非礼を承知で訊こうか。その薬師が自ら脱国した可能性はないのか？デガルが関わって
いようといなかろうとだ』

やや遠まわしに言っているものの、クラディアンはランシャの不忠実を疑われて瞬間的に怒り
を感じた。しかし、一国の王ともなればそのようなことは腹にしまっておくものだと心得ている
。短気や浅慮は、何の得にもならないばかりか、国に損害を与えることすらままあることを知っ
ているからだ。

「それはないと断言できる。薬師の警護につけていた衛兵は皆、立ったまま気絶していた。そん
な芸当が我が国の薬師にはまず行えないことは自明の理だ。そして幫助する者がいたとしても、
城外に出ることは容易く叶っても国外へ出ることは……貴公も知っている通り、まず不可能だ。
そして宮廷薬師が嫌になったのなら、辞める機会はある。国内に身を隠す理由もない」

『ほう？』

ベルヴォルフが興味ありげにしたが、クラディアンは説明をそこで止めた。一々、国内のことを
を他国に伝える必要はないと思ったからだ。実際彼が黙っても、相手は先を促さずにこう言った
。

『……まあ良い。確証はあるようだ。まだデガルが関わったとは認められぬが、何者かによって
かどわかされたのは確実なようだな』

その時、鈍い音が向こう側から聞こえ、従者らしき声がかくぐもって聞えてきた。

『分かった。しばし待て。……クラディアン、とりあえずはここまでだ。私からまた連絡を取
ろう』

簡潔に言うと、水面は暗転し、一瞬の後には澄んだ清水に戻っていた。通信が断ち切られた
のだ。水晶は金を纏ったまま、水の精のように緩やかに舞う。

クラディアンは、重い息をつくつと、執務室の椅子に倒れるように腰かけた。新たな事実が分か
ったことは大きい。だがその成果を喜ぶ余裕も理由も彼の内には存在しなかった。ベルヴォルフ
が拉致に関与していないのであれば、事態は一層複雑だ。デガルが単独で犯行を行ったほかに考
えられない。何より、彼にはそれを行えるだけの技量と、状況証拠がある。しかし、デガル自身
についてあまり知らないせいもあるが、彼が任務を代理させてまでランシャを攫う動機が思い当
たらぬ。

だがベルヴォルフがああ言った以上、彼の連絡を待つしかない。融通が効かないという点では
定評のある男だ。こちらから連絡を取ろうとしたところで応答しないに決まっている。

クラディアンは、自分でどうも出来ない事態に歯がゆさを覚え、再び溜息をついた。公務を放
り出すことなど許されるはずもない。今日も忙しさに忙殺されるだろう。心が揺らいでいること
を悟られないよう、気丈に振る舞わなければならない。そして一一疲れを癒してくれる者は今い
ない。

気の重さを振り払うようにクラディアンは勢いよく立つと、廊下で忠実に待機しているアンロ
ックを呼んだ。

第3話

「……う」

重い頭が徐々に覚醒し、うっすらと瞼を開けると、いつもと見慣れない天井が見えた。ランシャは、大抵いつも庭園で夜を過ごす。廊下へ出た隣に自室は用意されているのだが、鏡張りの天球から見た星々の輝きに包まれて眠り、日の光と共に起きるのが常だった。そのために、目を開けて見えたのが蒼穹ではなく平らな白亜と分かれると戸惑いを感じた。

頭だけでなく体も気怠さがあり、まともに動かせない。まるで風邪を引きかけたかのように頭痛と吐き気がする。だが、それらは意識がはっきりするにつれて薄れていった――身体だけはまだ言うことを聞いてはくれなかったが。

「目を覚ましたのかい」

しわがれた声が脇から聞こえ、驚き視線だけをそちらにやると、背は小さいがかくしゃくとした老婆がこちらを見ていた。

誰何しようと口を開きかけると、今度は聞いたことのある声が老婆の向こうからした。

「……酔いは醒めたのか？」

苦労して目を声の方向に向ければ、グラギオン王国の使者デガルが、無表情で壁に背を預けている。問いは、ランシャではなく老婆に向けられているらしい。

「まあ、だいぶ良くなったようだね。まだ完全ではないが、十分だろうよ」

「意識があってはやりにくくないか」

「やるのはお前さんさ。……どうせ、抵抗なんて十分に出来やしないよ」

『抵抗』という言葉に、デガルにされた仕打ちがランシャの脳内に甦る。同時に喉が焼けるような錯覚が一瞬起こった。顔から血の気が引き、微かに身体が震え始める。これから何をされるのか見当もつかないが、前と同じか、もしかするとそれ以上のことだろうと確信できた。

「あれはどこだ」

そんなランシャの様子には目もくれず、冷酷な戦士は淡々と口を開く。

「分かってるよ、ちょっと待ってくれ」

老婆が寝かされている寝台から遠ざかったかと思うと、どこかを探る音が続いた。やがて戻ってきた老婆は、手に小さな箱と、布にくるまれた細いものを持っていた。それをデガルに渡す。布が解かれ、箱が開けられる音が聞こえてきたが、老婆の頭でちょうど隠されていたい何なのかわからない。それが一層の恐怖心を煽った。

口を開いても、空気が通る音がするだけで言葉にならない。一旦、物を老婆に返したデガルが近付いてくる。

「震えているな。……背信を断った時は随分と威勢が良かったものだが。戦士ではない故に痛みへの免疫もないのだろう」

そうして、表情の変わらないデガルの手が伸び、ランシャの服の釦を外していく。釦は胸の部分だけに縫い付けられている。それがすべて外され、震える素肌が露わにされる。

老婆が近付き、ようやくランシャにもそれがなんなのか見えるようになった。手術用小刀と一

一何かの種である。大きさは雀卵ほど。嫌な想像が頭を掠める。

「……や、め……」

必死に言葉を紡ごうとする。どうにか声は出たが、恐ろしさの為に意味を成さない。

第3話

「声は出るか。……悲鳴を上げられると面倒だ。媼、布を用意してくれ」

なんとか絞り出した声は裏目に出た。だが、恐怖に震えているだけにもいかないのだ。精一杯の力を込めて、腕を動かそうと試みる。だが、それさえも許されなかった。

ランシャの細い手首をデガルが素早く掴んで、軽く捻った。それだけで耐えきれない痛みが起こり、口から抑えきれない呻き声が漏れる。その間に、四肢に枷が現れた。

「ちょっと、何をしてるんだい!魔法は使うなと言っただろう!」

再び戻ってきた老婆が声を荒げる。デガルは視線を外さずに答えた。

「魔法酔いは、薬師の身体に直接作用する術にだけ起こる症状だろう。手足を拘束するぐらいなら問題ない」

「さあね、あたしだってそんなに詳しくない。逆効果になっても責任持てないよ。ほら」

ため息をついて老婆が細布を差し出す。それを受け取ると、ランシャの口が塞がれた。恐怖の為に呼吸が速くなり、目尻に涙が盛り上がる。

「……手早くやるんだよ。まあ、あんたなら心配ないだろうけどね。失敗したら全部水の泡だ」

デガルが「分かっている」と答え、小刀を持ち直した。ランシャは身を振ろうとするが、ろくに動けない体ではそれもかなわない。切っ先が近付いてくるのを、こわばった表情で見ているしかできない。

「――っ」

冷たく鋭利な尖端が触れたと思った途端、刃は滑らかに下ろされ、肌と肉を深く切り裂いた。生温かい血が溢れる感覚の後に、形容しがたい苦痛が生まれた。だが、悲鳴を上げることも出来ない。

デガルは無表情なままで手にした種を、あろうことか傷口に無理やり押し込んだ。胸を焼く灼熱と、異物感についに涙が溢れ、体は大きく痙攣を繰り返す。

――だが、本当の拷問はここからだった。

か細い身体が、再度大きく波打った。僅かに開かれたランシャの瞳が、驚愕に見開かれ、そして耐えるように固く閉じられた。こぼれた水滴が頬の上に線を描く。

変化はやがて、傷口の外からでも目視できるようになった。

「……成功か」

「まだ分からないね」

容体を見守る二人のそんな会話は、痛みとおぞましい感覚に苛まれるランシャには届いてこない。体内に埋め込まれた種子から出てきた”根”が蠢いていたからだ。”根”は、傷口を塞いで出血を止めたが、それと並行して”地中”深くに伸びていった。そして――ついに、種は発芽した。

第1話

「デガル、そなたエンディウス国での謁見を他の者に任せたそうだな」

デガルが報告を始める前にそう言って、ベルヴォルフは文机から顔を上げた。

目の前の臣下には何の変化も見られなかった。ただ、この男ならばたとえ片腕を切り落とされたとしても表情を変えることはないだろうとベルヴォルフは思っていた。それほどまでに表情に乏しい男なのである。初めて顔を見た時から全く変わらない。だからこそ、他国の謁見に向かわせるのだが。

「何か事情があったのなら聞こう。理由もなしに勝手な行動を取ったのであれば厳罰ものだが、分かっているだろうな」

「はい、我が主。罪に問われるのであれば謹んでお受けいたします。……理由は、紫喰虫による体調不良です。馬車の中に潜り込んでいたのでしょうか、エンディウス王国に着く前に運悪く刺されてしまいました」

そう言って腕まくりをすると、確かに小さな紫の円が目立ち、その周りも斑に染まっている。紫喰虫は毒虫で、命に害はないが刺されると直後から激しい嘔吐感や発熱を発する。

「刺されてすぐに薬を飲みましたが到着時は起き上がることも困難で、やむなく部下にさせたのです。陛下もご存じでしょう、イラルカです」

「……イラルカか。最近よく名を聞くようになったな。そなたからも、他の臣下からも」

「ええ、目覚ましく力を付けてきています。部下に負うべき責はありません。むしろ突然の事態でも、問題なく交渉を終えました。此度の働きも踏まえて、近々副隊長に任命しようと考えております」

直感的にベルヴォルフはデガルの言うことが、すべてではないにしろ、真実ではないと判断した。デガルは先頭だけでなく頭も切れる。腕の傷もどうとでも出来る。

「なるほどな……言い分は分かった。しかし、やはり務めを他人に任せたのは、任務放棄とも捉えられかねない。昼の訓練の後、イラルカを連れて共に来い。処分を言い渡す」

「申し訳ありません」

それから先を追求することなく、ベルヴォルフは報告を促した。

デガルが静かに礼をし、退室するために背を向ける。そこへ王の言葉が追いかける。

「デガル。今回そなたがしたことは、いくら不慮の事故とはいえ一歩間違えれば国家間の信頼関係の崩壊につながる事だ。それを肝に銘じておけ」

王の右腕は、その言葉に足を止め、身体ごと振り向いた。数秒主へ視線を向け、そして今度はより深く頭を垂れ、素早く辞去した。

「……そして、私とお前の信頼関係も、だ」

凜然とした支配者の面持ちで言い放つと、ベルヴォルフは手元にあった書類を全て片付け、席を立った。予定を確認するため従者を呼び、重要な用件が入っていないのを確認すると、王は巨大な壁掛けの前に佇んだ。

――城の様子がとてつもなく細かな描写で織り込まれた献上品である。所々に壁がなく、中に人や家具が見えた。

「これを使うのは何時ぶりだか。……デガル、いくらグラギオン屈指の男だとしても、そなたが知りえない魔法は存在する」

　　瞼を下ろすと右腕を上げ、織布に軽く触れる。ベルヴォルフの指先から淡く青白い光が発生した。

第1話

「……」

王の執務室から出たデガルは、しばし歩きつつ黙考した。

今回のことを王に知られないと高をくくっていたわけではない。最初から告げるつもりだった理由は、決して不自然なものではないだろう。紫喰虫はこの時期姿を現し、国の外周警備の兵も何人か被害にあっていた。だが本当の目的は薬師誘拐だ。一応は納得してくれたと思うが、下手をすれば王に疑惑を抱かせかねない。

国王ベルヴォルフは、まさに厳しい環境にあるグラギオンの国風を現したかのような人物である。自他共に厳しく、特に公務において甘えを許さない。規範を破れば罰し、時には城内のあちこちを自ら視察して不正行為を暴いたりもする。だが、暴君ではない。それは主に対する臣下及び国民の一致した認識であった。グラギオン国王は、これまで国民に無理な貢納を強要したり、国の財を私的に費したり、臣下に理不尽な要求や処罰を下したことはない。声高に叫ばれるものではないが、国王に対する支持は大きい。

――さすればこそ、長らくその座に留まってもらいたい、というのは忠実な臣下の願いである。

グラギオンには現在、后がない。それは、そのまま後継者がいないことを指す。グラギオンは、選出制度のエンディウスと異なり、直系継承である。現国王に何かあれば、国が立ち往生することはまず間違いない。系族がないわけではないが、少ない上に誰もが高齢でとても国の統治など行える状態ではない。最も有能な臣下が成り変わることになるのかもしれないが、それでも民草の了承を得られるかは不明である。まだベルヴォルフは若いのが救いだが、子がないのは即急に解決すべき憂慮であった。

「……忙がねば」

その呟きは、誰の耳にも入らず、ただ開いた窓から吹き込んだ春風に飛ばされていった。

「では、グラギオンが国として今回のことを行ったわけではないと？」

アンロックは驚きを隠さなかった。

「ああ、ベルヴォルフの反応と対応の仕方からすればそう考えるのが妥当だ。彼は下手な茶番など好まない」

「しかし、だとすれば何故デガルが一人……いえ、共犯の代理者と事を行った理由が分かりかねます」

クラディアンが思ったのと同じことを大臣も口にした。

「そうだ。だが……大事なのは理由や目的よりも薬師の奪還だ」

「はい」

苦い顔をする国王に対して、アンロックはずっと考えていたことを提案した。

第2話

ベルヴォルフは銅像のように立っていた。先ほどから微塵も動かない。相変わらず右手は壁掛けに触れたままである。発せられる光は強弱を繰り返していた。

彼の意識は今、この城内すべてを巡っている。壁掛けの縁に織り込まれた文様がもともと大きな彼の力を増幅し、術の行使を助けているため、彼のいわば心眼は居城内を縦横無尽に視ることが出来た。臣下や侍従、城の構成員達が仕事に勤しんでいる。デガルの姿も捉えられた。疲れも見せずに軍の訓練を毅然とした様子で指揮している。その中には、イラルカが仲間と共に汗を流しているのも見て取れた。

さらに城の細部に眼を凝らす。使われていない客室や物置、人を隠せるような場所はあらかじめ探したが、何も異変は見当たらなかった。記憶している限りでは、問題となっている薬師は小柄でどこにでも隠せそうではある。しかしそれを加味してベルヴォルフがどれほど慎重に探索をしても、どこからもその姿は見つからなかった。

王の頭に、一つの考えが浮かんだが――すぐに掻き消された。それは、デガルが自国に戻る前の荒野において薬師誘拐の目的を果たしたのではないかということだ。用済みになれば、消すには大した労力を払わずに済む。だが、両国の関係を揺るがすほどの危険を冒してまで、そのような愚かで単純な行為に踏み出す男ではないはずだ。

「……」

動機が知れぬ、とベルヴォルフは考える。だが、デガルという男のことをよく知っている以上、今回の行動には不可解な点があることは明解であり、クラディアン言うことは熟慮するべきとも思っている。状況を聞く限り、確かにそのような真似ができ、居るべきはずだったはずの場所にいなかったのはデガルを置いて他にいないだろう。

――しかし、薬師の所在も知れぬうちは安易に責め立てることは叶わぬ。

ベルヴォルフの眉間には深い溝が出来ていた。とにかくは、ありのままをクラディアンに伝えなければならない。

「……見当たらない？」

再びエンディウス。昼が過ぎ、徐々に夕刻へと変わっていく。ランシャの行方が分からなくなってから、約一日が経とうとしている。

『ああ。わが秘法をもってして城の内部全てを見通したが、どこにもおらぬ』

ベルヴォルフは、まずデガルの任務放棄を認め、代理をした部下共々処罰を課したことを告げた。その後で、何故かどこかにいるべきである薬師がどこにもいないことを報告した。

「そんな馬鹿な……」

『私もデガルがそなたの薬師を奪ったかもしれぬと考えてはいる。だが、肝心の薬師が見つからぬ。荒野に消したかとも考えたが、どうも納得が出来ぬままだ』

ベルヴォルフの考えた恐ろしい想像に、クラディアンの肝が冷えた。

『探索は続けるが、最早期待はせぬ方が良くかもしれぬ。此度のことで、臣下のしたこと――少

なくとも無断の代理謁見一々に対しては詫びをせねばならぬ。次の交易では、我が国の品物は献上物として呈する。何か加えるものがあれば加えよ』

予想もしなかった返答に思考は止まったが、気付けば会談を言い争いもなく終わらせていた。

「やはり……お前が言った通りにするしかないようだ、アンロック」

振り向けば、アンロックが若干の緊張を湛えた表情で首肯した。

第2話

その子どもは、忽然と現れた。

赤ん坊が国門で見つかったという話は、一時国中を騒がせた。子は、見張りの番兵が、夜明けと共に交代する際に発見された。そして城に保護された。赤子は発見時も昏々と眠り続けており、春だったから良かったものの、もし秋や冬の折であったならとうに命の火は掻き消されていただろう。

国内で貧しい家の者が捨てたとは考えづらいとされた。民ならば最初から城門の前にでも置くであろうし、そもそもエンディウス国にはあまり貧困がない。――農耕が盛んなため、食べるものは少なからず得ることが叶い、着るものにも困るようであれば申し立てて援助されることになっているからだ。結局、赤子が国内ではまず見られない珍しい髪色と瞳の色をしていたこともあり、国の外を通った旅人達が捨て置いたのであろうとして片付けられた。番兵達は、そのような者共は全く居なかったと主張していたが。

その赤子は、城の乳母に育てられた。数年後、その乳母が病気で死に、引き取り手を捜した時に名乗りを上げたのが当時の宮廷薬師だった。

彼女はとても美しく、年齢は知られていなかったが大分上であろうと噂されていた。定期的な試験を通り、長らくその座に居た。赤子はもう子どもに成長しており、その後をいつも付いて回っては薬草について質問をしたり教えられていた。当時、クラディアンは、あまり庭園に赴くことはなかったのだが、薬師と子の姿を見て、まるで女神と天使のようだと頬を染めて少年心に思ったものである。

だが、その光景はそう長く続かず、薬師はエンディウス王国の背後にある広大な森林の中に薬草を見て回ると言って消えた。その頃は森には護衛を付けないでいたが、その事故があってからは護衛の為につけられるよう決まりになった。しかし、薬師に育てられた子――ランシャは、親代わりであり師でもあった彼女を喰らった森を恐れて、足を運んだことはこれまで数えるほどしかない。

ランシャは、師亡き後宮廷薬師を引き継いだ。エンディウス国において、宮廷薬師は技量と忠誠心の両方を問われる。役目を授かった後でも、年二回の試験で基準に満たなければ剥奪、国内の薬師に応募をかけて選抜を行う。ランシャは事情と意志を考慮されて定期的な試験を受け、見事最年少にして宮廷薬師の位を授与された。

その当時すでに王位を継承していたクラディアンは、久方ぶりに見たランシャの成長と試験の結果に驚き、また忠誠心を誓うその姿に胸を打たれた。暫くは距離を置いていたが、年が近いこともありすぐに打ち解け今に至る。

クラディアンは、アンロックが数回呼ばねば気が付かぬ程深く追憶に浸っていた。

「私も外からお助けいたしますが、ほとんど陛下のお力が頼みです。心配は必要ないと思いますが、どうかお気をつけて。下手すれば空間に閉じ込められてしまいます」

「分かっているさ。留守を頼むぞ、アンロック。……ああ、それと」

向き直り笑いかけてきた王に大臣が怪訝な表情をすると、クラディアンは先を続けた。

「無事にランシャを取り戻した暁には、約束していた打合いをしよう」

そう言うと、アンロックは唇をかみしめて頭を下げた。

「争いにならないことを願っていますが、御武運を」

「ああ。行ってくる」

クラディアンの目前には、ベルヴォルフに使ったものよりもさらに大きな水盆で、二人がいるのはその水盆が何とか入る広さの部屋だった。窓の類は一切なく、装飾もない。ただ巨大な水盆の周りに、力が注ぎ込まれている証拠に術輪が黒く浮き上がっている。

クラディアンは跳躍すると、水盆の中央に飛び込んだ。水滴が散ることはほとんどなく、彼の身体は水盆に吸い込まれ、水に透けたかと思うと掻き消えた。

後にはただ、波紋があるのみ――。

第3話

水滴の落ちる音が辺りに反響していた。滴りは小さな澄んだ地底湖に吸い込まれて幾つも輪を描く。地底湖の周りは柔らかな苔や地衣類が覆い、所々に陽光を嫌う低植物が生えていた。それらの中で発光性を持つ植物たちが発する蒼や緑の淡い光が洞窟の中を満たし、幻想的な雰囲気醸し出していた。

その中に、さらに幻惑的なものがあった。

しゅるりしゅるりと伸びる小さな葉を螺旋状につけた蔓を纏う、人形――。

胸の部分から蔓は止まることなく伸び続け、座っている人形の身体だけでなく、今や地衣類の上にも伸び始めていた。そして、蔓の巻き付いていない頭部には、また別の植物が芽を出していた。いくつもの小さな葉が天使環のように生え、そしてその中央には”蕾”が膨らみつつあった。

だが――これは人形ではない。湖のように澄み潤んだ瞳は、どこを見ているか分からずとも、人間のそれだった。何より、娯楽がさほど発展していないグラギオンでは、これほどの人形を作れる者は存在しない。

漆黒の髪、ぬけるように白い肌、そして反射した青や緑が揺れる紫瞳――ランシャであった。両手をそろえて座っているが、焦点もあいまいで、はっきりとした意識が感じられない。それがまた人間離れしたもののように思わせるのだった。

ここは、王さえも知らない城の地下洞窟。小さな半球に近い形をしており、天井は大の男でやっと立てる程度しかない。地底湖は円の約半分に弧を描いている。奥の壁の水没しているところにそれほど大きくない穴が見える。そこから水源につながっているのだろう。

デガルがここを見つけたのは全くの偶然だった。城の地下倉庫に用事があった時、床のひび割れを発見し、点検している最中にひびが広がった。難なく落下は免れたが、下から零れる光には心中驚いた。歴史書の類は様々に手を出して読み漁っていたが、このようなものがあると書かれた書物は一つもなかった。誰も知らず、誰も入らなかった場所。神聖な雰囲気が漂うこの空間はそう公にするべきでもない、目立たぬよう塞いで封印した。

塞ぐ前に一旦降りて横穴がないかどうかも確認したが、岩壁は厚く、薄かったのは上部の一部だけらしいという結論に達した。もし、洞窟が縦横無尽に城の地下を走っているのであれば、幾つかは塞いで城の土台が崩れないようにしなければならず、またそれ以外は貯蓄の為や万一の時の避難経路確保として考えただろう。しかし、デガルはそうは考えなかった。なぜなら、そこである文書を発見したからだ。古びて、湿気の為に端々がかびてしまっていたが、文字の大半は解読可能だった。それは古文書で、グラギオン王国創立時に使われていた文字や文法で書かれていた。しかし、王の側近として教養も求められるため、デガルのような地位にいれば様々な古書に触れることも出来る。文字を追うことが苦にならなかった彼は、多くの知識を有しており、したがってその内容を読むことにも大して苦労は感じなかった。

第3話

――”発芽”した直後、宿主は再び気絶したが、今度はそう長いものではなかった。そして、開かれた瞳はすでに力を失っていた。

「早く、この子を例の場所に移動させな」

移動させたのは、姫の指示だった。王に知らせないと告げた時、隠れ場所を用意するように言われたのだ。そういった場所は、あの洞窟を置いて他になかった。

「早くしな!でないと、この治療室は植物に埋め尽くされちゃうよ!」

焦るために老婆はいつもより声高だった。見る間に、薬師の胸から発芽した植物が蔓を伸ばし始めていたからだ。

「いいかい、隠れ場所ではこの子を座らせるんだ。その位の体力はまだあるはずだよ。”不滅の種”の古文書にはそう書いてあったんだろ」

ランシャの身体に埋め込まれた種は、名を”不滅の種”という。

デガルが地下洞窟で発見した厚い古文書には、その”収穫方法”が載っており、最後の方の紙は中央に穴をあけられ、小箱が隠されていた。その中にあったのが、乾燥した種だった。

『乾燥シタ種ノ 効能ハ 失ハレテイル。発芽サセ 新タナ種ヲ 取レ。 愚カ者ヨ コノ 悪魔ガ 授ケタ 種ヲ 使ウカ?』

抉られた穴の上の頁には、そう書かれていた。それまでの文字と違い、その部分だけが書体が崩れて読みにくかった。

”種”を植えるのは、なるべく清潔な空間が良いと書かれていた為、器具や薬が整っている宮廷薬師の仕事場でなければならなかったが、発見される危険が及ぶ上、”発芽”後は伸びた植物が辺りを覆いつくすのだという。”種”が定着してすぐに、城内を魔法を使って跳び、封を解いたというわけだ。幸いにして宿主は移動の魔法の影響を受けなかったらしい。

「こんな面倒事、二度と御免だよ!あんた達兵士と違って平穏無事に生きてたいんだからね!」

息まいて老婆が吐き捨てるように言う。姫は、半ば脅されて事に助力していた。王に背いたことが白日のもとに晒されれば命はない。きっと残酷な処刑が老いた身を待つことだろう。だが、結局は薬師としての興味が、雲の上の存在よりも勝った。エンディウスのような主従関係は皆無で、王に日々薬等を献上するものの、声をかけられることはおろか、姿を見ることもままならなかった。そして今、漸く苦しみから逃れられるという解放感から、老婆は急いているのだった。

。

「ああ。手間をかけさせたな。ご苦労だった」

礼もなくそう言い残して、力の抜けた小さな体を抱えたデガルは姿を消したのだった。

第4話

ぱた、と水滴の音が止んだ。時が止まったかのような空間の中で、動くものは一つだけだ。

先を伸ばしていた蔦は、徐々に地面を覆い始めていた。頭上に抱く蕾も非常に緩やかではあったが、ふくらみを大きくしている。まだがくに覆われて花卉の色は分からない。

だがここへきて、今まで微動だにしなかった宿主がその体を動かし始めた。蔦が巻き付いて動きがぎこちなく、大した距離ではないのだが進みは遅かった。そのさまはからくり人形のようにすらあった。焦点はぼんやりとしたままだったが、目は波紋が消えた湖面へと注がれている。

ようやく湖の端に辿り着く。そこは岸のようになっており、限界まで草と苔に覆われていた。そこに両手をつくると、水面を窺うように身体を少しかがめた。その表情に何の変化も見られない。

。

変化があったのは、湖面の方だ。最初は淡い水色。そして次に蒼。濃青。色合いを強めながら、光が水中から漏れてくる。その現象が治まると、水面が鏡面のように揺らぎ、水中の様子が変わった。薄暗かったのが、岸边に近い一部だけやけに明るい。

そして、その中に現れたのは――。

『ランシャ……か？』

クラディアンであった。顔を歪めてランシャを見つめる。それは決して呼吸が苦しい為ではない。ようやく見つけたことによる疲労と安堵の為だった。

エンディウス王国の”水鏡”には奥義がある。魔法による移動だ。移動元には、自身の身体を通らせる水が必要だが、移動先には必ずしも必要なわけではない。”水の通路”では呼吸もでき、衣服や体が濡れる心配もない。外の様子を窺うことも可能なら、それを外の者に見られることもないのだ。この秘奥は、エンディウス王国の国王のみが使用することが許されている。臣下の中には、アンロックのように知っている者もいるが、大抵は記憶の底に眠っている。なぜなら、これは王位についている間、一度使うか使わないかと言うほどの術であるからだ。その理由は、エンディウス王国が限りなく広い国土を持っているわけでもなく、瞬時に移動が必要な緊急事態がそう起こらないこと、そして――多大なる魔力を必要とするからである。健常者であれば、半刻も持たない。クラディアンは今、アンロックに魔法を担わせているが、そろそろ彼の肩代わりも限界のはずであり、次はクラディアンの魔力が消費されていくことになる。ランシャを連れ帰るためには、ある程度の力を残して置かねばならず、搜索は急を要した。

まずクラディアンは、水辺を一斉に見て回った。もしランシャが近くにいれば、すぐにエンディウスに戻すことが出来る。水がなければ、魔力をさらに使って水の通路に穴をあけて外界に通じなければならない。

グラギオンは水もそう豊かではない為に、城内ですら探す場所はそう多くはなかった。地下洞窟はこうしてあっけなく発見された。

『ランシャ？ 一体どうしたんだ。……私が分かるか？』

様子がおかしい上に、植物が巻き付いているランシャの様子にクラディアンは戸惑い、心配し、声をかける。

「分からないだろうな。その薬師は生気を失っている」

答えたのは、鋭い声だった。

第4話

クラディアンは素早く顔を動かし、声の主を見定めた。視線も姿勢も変えないランシャの斜め後ろ、少し離れた所に立っている。

『デガル……貴様！』

たちまちに憤怒の声色になるが、相手は顔色一つ変えない。ランシャを見下ろし、一言つぶやいただけだった。

「ここまで成長したか。恐るべき成長力だな」

デガルは、この地下を出る際に空間に対して魔法を使っていた。何かしらの魔法を感知した場合、瞬時にそれを術者に伝えるものだ。もちろん、壁全体と地底湖の湖底のみでランシャに触れないようにしている。クラディアンが地底湖に"水鏡"を接続した瞬間、異変を察知したデガルはすぐに城内でならある程度使える空間移動を行使した。

『ランシャに何をした!?!』

その問いには答えは返らなかったが、視線は水面の方へ向いた。

「エンディウス国王か……悪いが、貴国の薬師は我が主の為に使わせてもらう。誰にも邪魔はさせせん」

冷酷さが一層濃くなる。

「即刻、退城願う」

金属音と共に、腰に差された剣を抜く。知るはずもないが、"水鏡"は、接続先の水面が突き破られると強制的に中断され、術を継続できなくなる。

空を切って切っ先が下を向く。だが――。

鋭い音がして、剣先は弾き返された。

「させるものか」

水面が盛り上がり、割れて中から剣が突き出されていた。水中から飛び出したクラディアンは、その勢いのままデガルに切りかかる。彼はかわしたが、間合いを取っただけで反撃してこなかった。

「貴様が犯した罪は重いぞ」

剣を構えたクラディアンが、不敵に笑う。

剣が弾き返された。宙を回り、壁際の地面に突き刺さる。

デガルが膝をついていた。荒い息が繰り返される。所々に切り傷が目立つ。対峙するクラディアンは油断なく剣の先端をデガルに向けている。

勝負は苛烈を極めた。攻防の境もなく、しばらく剣同士がぶつかりあう大きな金属音が洞窟に反響していた。だが、国王の方が強かった。ただ、グラギオン随一の腕前を前にして無傷でいられるほどの余裕はなかったが。

クラディアンは開いている片腕をわずかに上げる。

「……!」

鎖の幻影がデガルの身体に巻き付く。

「命までは奪わん。そこで大人しくしているんだな」

言い捨てると、背を向けランシャの方へ歩み寄る。デガルは身を振ろうとしたが、指一本動かせない。魔法を使うことも封じられているようである。

――これが……

デガルは格の違いを思い知った。いくらグラギオン中で魔力も強いと言われようと、一国の主には敵わなかった。決闘は引けを取らなかったが、デガルの使えない強力な魔法を使ってくる。

これまで、エンディウス国王自身の能力や力を目のあたりにすることはなかった。しかし、一般の兵よりは上であろうというのがデガルの予想だった。クラディアンは、彼の予想をはるかに超えた実力を兼ね備えた王者だったのだ。

「ぐ……」

だが、感嘆している場合ではない。ここで薬師を取り返されるようなことがあれば、目的は果たせなくなる。無理矢理にでも束縛を緩めようとする。

第1話

クラディアンは、岸に座り込むランシャのもとへ近寄った。ランシャは、彼が現れる直前に動いた後は、顔をまた上げただけで再び停止していた。二人の激しい乱闘も耳に入っていないようだ。

傷口から流れる血を拭くと、痛々しげな表情を和らげクラディアンは呼びかけた。

「ランシャ」

自分の名前を呼ばれても、変化は見られなかった。デガルの言う通り、生気がない。まるで生き人形のようなのだ、とクラディアンは思った。何をされたのか知らないが、魂の抜けた様子は見ていられなかった。

この状態の元凶は、体にまとわりつく植物のせいであろうと考えられた。身に着けている服の胸が裂かれ、そこから紅い種がのぞいていた。蔓はこれから伸びているのだ。クラディアンは伸び続ける蔦を束でつかんだ。収めた剣に手をかけ、引き抜こうとする。

「その蔦を切るなっ!」

切り裂くような叫び声に、手が止まる。後ろを振り返ると、束縛を解けずにいるデガルが、真剣な表情でこちらに向いていた。

「その蔦を切るな。その者の命に係わるぞ」

もう一度静かに告げると、デガルは息をついた。クラディアンが使ったのは、相手の魔力を吸い上げて拘束する上級の魔法である。力があればあるほど、その術は強力になるのだ。その為に、今デガルは急速に魔力を消費している。

「どういうことだ」

焦って問う。一刻も早くランシャを回復させたいと望む彼にとって、その言葉は聞き捨てならなかった。

だが、デガルはなかなか口を開こうとしなかった。詰問の声を上げようとした時、ようやく答えを発した。

「蔓が栄養を頭上の蕾に運ぶ役割をしている。その蔦を切れば植物体は全て枯れ、宿主は必ず命を失う。新たな種が出来るまで待っても同じことだ。その薬師は最早、助かる見込みはない」

「なん、だと……」

信じがたい思いが込み上げる。

「偽りを言うな!」

「……偽りなものか。俺の言葉が信じられぬというのであれば、一刀のもとに切り捨てればよい」

デガルの表情を読み取ろうとしたが、困難だった。常にある無表情ではなかったが、今は疲労に抗っていることしか読み取れない。時間を稼ぐための方便だと思い込みたかったが、告げられた事実は完全な虚偽とは捉え難かった。

ランシャへ顔を戻す。動かない表情の上に目を移すと、重そうに膨れた蕾が細く短い巻き草に囲まれていた。隙間から覗く花卉は、真紅だった。花開くまで、もう僅かもない。

第1話

「貴様……!」

今度こそクラディアンの顔が怒りのあまり、朱に染まる。

「目的のために、唯一の道を選んだまでだ」

デガルはなおも冷血な表情のままだった。剣を持つ手が震え、今にも彼に切りかかりそうになる自分を、クラディアンは必死に抑え込まなければならなかった。

「ならば魔法に頼るだけだ」

手に持っている蔓に目を落とし、力を放出しようとする。

「エンディウス国王は何としても、その薬師の命を奪いたいらしいな」

デガルらしからぬ皮肉に、眉を顰め、視線だけそちらに向ける。笑った顔を見たことのない男の口角がわずかに上がっていた。

「そなた、言い間違いをしているぞ。私は、ランシャを何としても助けたいのだ」

「ならば、なおさら魔法は使わぬべきだ」

己の知らぬことばかりを言われ、クラディアンは軽い混乱を覚える。デガルの言葉を鵜呑みにして良いということはなく、むしろ何も信じるべきではないはずだ。だが、ランシャの状態を見る限り迂闊なことは出来ないのが明白であった。

「どういうことか説明せよ。……すぐにだ」

「簡単なことだ。薬師は魔法が使えない。その身の内に、魔力を内包していないからだ。それ故、魔法をかけられると身体が過剰な反応をする。俺が連れ去った直後も、安易に眠りをかけてしまったが為に発熱し、軽度の意識不明になった。今、薬師の身体は”種”に蝕まれ体力が極限に落ちている。意識が混濁しているのがその証拠だ。そんな状態で魔法をかけられれば、良くて一生の昏睡、最悪、過剰反応によって死ぬだろう。そうなれば、いくら魔法でも何も出来ん。分かったら、何もしてくれるな。我が国、我が主の為なら、俺は何でも犠牲にする」

そう言い切ったデガルの表情はいっそ清々しいほどだった。クラディアン自身の王としての直感からいっているのであれば、デガルは大事なことを表に出さないことはあっても、虚偽を軽々しくその場しのぎに使うような性格ではない。しかし、これが前者か後者か判断するには、手元にある知識があまりにも少ない。

「……一体、ランシャを使い、怪しげな植物を育てて何をするつもりだ。なぜ、ランシャでなくてはならなかった？」

浮上してきた問いをぶつける。事態は一刻を争うというのに、対面する男の言うことの真偽のほども分からなければ他にどうして良いのか分からなかった。

「言いたくはないが、人間を調達したかったのであれば自国の民でも良かったはずだ。お前の言う通り国の為ならお前のことだ、国民の一人ぐらいは簡単に連れて来れたろう」

デガルがやや顔を伏せ、薄暗い中で表情が見えなくなる。

「答えよっ!」

鞭打つような叱責が、クラディアンの口から飛び出す。刀身を抜いてデガルへ向ける。

それでも、しばらくの間デガルは俯き何も言葉を発しなかった。力も大分弱まっているはずだ。そのため、気を失ったのだろうかと考えたが、強靱な男は意識を手放すなどしていなかった。「……その薬師が、毒も薬も効かぬ身体だから、だ」

クラディアンは、その言葉を聞き取れなかった。デガルは顔を見上げ、クラディアンが放心しているようだを見て取ると、もう一度繰り返した。クラディアンは、その言葉を信じられなかった。

だが追及は遮られた――ついに”蕾”は開花へと至ってしまったのだ。

第2話

紅い花弁が零れるように開く。血よりもなお鮮やかな真紅が広がる。それに合わせるように、ランシャの顎が緩やかに上がり、瞼が薄く閉じられる。

一枚の絵画のような光景は、しかしクラディアンには見てはならぬ艶やかさを感じさせた。

大輪は、普通の花よりも急速に花弁を広げ、その中央には雄蕊と雌蕊が重輪となって鎮座している。花全体が仄かな淡紅色の光を放っていた。

完全に開花した。誰も目にしたことのない紅が眩しいほどだ。ランシャは花の重たさの故か、また頭を下げ、眠るように目を閉じる。

「見るがいい。すぐに花は枯れ、種子が出来るのだ」

デガルの言葉通り、花の色は急速に輝きを失いつつある。――やがて花弁は萎み、変色し、はらはらと落ちる。受粉した雌蕊が膨らみ、そこから種が出来るのだろう。そして、ランシャの命も散るのだ。

目の前で起こる事の速さに、クラディアンは焦りよりも大きな恐ろしさを感じた。何かせねばと思うのに、何も思い浮かばないのだ。手が、顎が、震えた。言葉すら、形にはならない。

ただ、剣を落とし、ランシャの傍らにしゃがみ込むことしかできなかった。手で触れることが出来る距離にいても、ひどく遠く感じられる。

「そこまで育ってしまったのか」

低い声が、そして一筋の光が沈黙を割る。反応したのは、クラディアンだけではなかった。デガルが、その身をびくりと震わせるのが背後からでも伝わった。

クラディアンは後ろを向く。

「遅くなった。まさか、ここを見つけているとはな」

静かな目をしたベルヴォルフが”本来の”入り口の前に佇んでいた。閉鎖空間だった洞窟の天井に開いた穴のほど近くの側壁に、人がようやく通れるほどの隙間が現れていた。どうやら引き戸のようなものが壁に隠されていたらしい。洋燈の光はそこから漏れてくる。

「ベルヴォルフ様……」

絞り出すような掠れた声で、デガルが主を呼ぶ。取り乱すことこそなかったものの、術のせいだけでなく顔色が悪かった。

「よくもこのような罪を犯してくれたものだ。エンディウス王国に何の弁解も出来ぬではないか。おまけに力でさえ敵わぬとは、グラギオンの恥さらしよ」

打つような言葉に、デガルが頭を垂れて絶句する。

「クラディアン」

呼ばれ、視線をデガルからベルヴォルフへ移す。

「此度のこと、すまなかったな。そなたの大事な薬師を、私の臣下が傷付けるなどと……」

苦々しげに謝辞を述べるベルヴォルフに、クラディアンは愛刀を拾いつつ腰を上げて言葉を返す。

「謝罪はいい。どう謝ろうと、ランシャはもうすぐ……死ぬのだ」

最後まで顔を上げていられずに、下を向き、唇を噛み締める。だが。

「デガルに、助ける術がないとでも言われたか」

驚いて顔を上げると、グラギオン国王は、分かりづらい笑みを浮かべて顔を歪めていた。

第2話

「出来る、のか？」

「デガルごときではどうにもならんさ。それに、此奴が参考にしたであろう古書は劣悪な代物だ」

ベルヴォルフが、臣下の脇を通り抜けこちらへ近づいてくる。

「安心するがいい。"種"は取り除ける」

クラディアンは体の力が抜けるのが分かった。しかし、ベルヴォルフの話はそれだけでは終わらなかった。ランシャの前に膝をついて、観察したことを淡々と語る。

「だが、成長が進み過ぎている。"種"を身体から取り除いたとしても、衰弱が激しいだろう」

「では……！」

動揺した声を出すと、ベルヴォルフは「安心せよ、と言っただろう」と片手をあげて、杞憂を振り払った。

「目が覚めるには時間がかかるだろう。下手をすると、一年以上かかるかもしれん。だが、絶命するまでには至らない」

ベルヴォルフは、上げた左手をランシャの胸にある"種"の前に掲げると、聞いたことのない言葉を紡いだ。

左手から青白い炎が立ち上がる。よく見ればそれは炎ではなく、淡い光が揺らめいているだけだった。その手を前に出し、ランシャの胸に触れる。眠りの人形は、目を醒まさない。

次の瞬間、ベルヴォルフが素早く力を放出し、"種"を体内からはぎ取った。繋がっていた蔓は、炎の幻覚に断ち切られて地面に伸びる。そして動かぬまま萎み枯れた。

「これが、元凶だ。よく見ておくがいい」

ベルヴォルフが、立ち上がって体を回し、手に持った"種"を掲げる。彼の手に収まるそれは、まるで小さな心臓のようだった。

手の光が強くなり、今度は本当の炎が噴き出した。それが掌中を覆った時、ベルヴォルフは掌を返した。炎は、落下しきるまでに紅い"種"を焼き尽した。

すると、それに呼応するようにランシャの身体が後ろにくずおれた。

「ランシャ！」

駆け寄れば、頭上に抱いていた大輪の花は、花弁を散らし、完璧に頭部から分離していた。周りを囲っていた小さな蔓草もない。艶のある黒髪だけがただ広がっていた。

呼吸は微かにしか聞こえないが、それでも安定して胸が上下していた。傷口は塞がっており、出血もない。

かけがえのない者を失わずに済んだ、静かで大きな歓喜がクラディアンの中で波となって押し寄せた。

第3話

「ベルヴォルフ……感謝する」

クラディアンは深く頭を下げた。

「礼を言われる筋合いはない。臣下の責任を取るのは王として当然のことだ。貴公も立場が逆ならばそうしたであろう」

「では……礼代わりに、次の交易も今まで通りにしてほしい」

しかし、ベルヴォルフは頑として首を縦に振らなかった。

「それに、此奴の事はまだ終わったわけではあるまい？」

顎で指示されたデガルは、もはや何の反応も返さなかった。力も限界まで吸い取られて、気絶寸前なのだろう。クラディアンは力強く頷いた。

「ああ。今はランシャを一刻も早くエンディウスに戻したい。だが、その後また――直接こちらに来るか分からないが――詳しいことを教えてくれ。私には分からないことばかりだ」

「そうであろう。では、貴公の国へ帰るが良い。手助けしよう」

ベルヴォルフが、腕を伸ばして湖を指す。湖面は渦を巻き、中心は空洞となって異空間への口を開いている。

「では」

クラディアンは軽いランシャの身体を抱き上げ、湖へ歩き出す。

「その薬師に魔法は使うな。そして薬も意味を成さぬ。……回復が遅いからと急いで、手遅れになろう」

驚愕に振り向くと、相手の視線は忠臣だった男に向けられていた。

「彼が言ったことは本当なのか」

「ああ、そうだろう。でなければ、貴公の薬師は連れ去られなどしなかった。……さあ、行くが良い。公務を放って来たのではないか？」

凶星を言い当てられた。

「随分とその薬師に執心なようだな」

「……恥ずかしながら」

そうとだけ答えると、クラディアンは身を躍らせ、空洞に身を投じた。すぐに水は穴を埋め、波紋がすぐに収まった。

第3話

クラディアンとランシャは無事にエンディウス王国へと帰り着き、アンロックを安心させた。

”水鏡”の秘奥は、いったん水の通路を通り抜けて外に出ると魔法が切れ、魔力の供給が叶わなくなる。隣国へその先を伸ばし、かつそれを維持し続けることは想像を絶する負荷がかかる。そのため、クラディアンとアンロックの二人が考えていた最善策は、クラディアンが”水鏡”にいながらにして、ランシャに呼びかけ、中へ引き込むというものだった。しかしそれは叶わず、接続は解かれ、アンロックはただ主君の帰りを待ち続けることしかできなくなってしまった。ようやく二人が”水鏡”から抜け出した時、迎えた彼は疲労と共に、喜びで眼を赤くしていた。

ランシャはなかなか目を醒まさなかった。だが、状態は悪くなく、医師によればただ眠っているだけに近いという。最初は宛がわれていた寝室に寝かせていたが、屋上庭園の方が環境が良からうと、寝台を移した。その場所は、”庇”の下だった。適度に日を浴び、また風や緑の匂いを感じることが出来る。また、ランシャはもともと庭園で寝食をしていたのであり、覚醒が早まることを期待しての処置だった。

グラギオンとの会見は数日後に行った。やはり、両国の間を行き来するのは障害が多く、自国を放っていけるほど公にしたい問題ではないということを考えて、会見用の水鏡を使用するにとどまった。

ベルヴォルフは、話し始める前に「真実を知る覚悟はあるか」と訊いてきたが、クラディアンにしてみればそれは愚問だった。デガルが放った言葉は、クラディアンの既知を覆すことばかりであった。彼はそれを知らねばならないと考えていた。王としてよりも、ランシャに近い者として。

全てを聞いた後も、ランシャに対する不信感が芽生えることはなかった。そして彼がそれを知らなかった、気付けなかったということで自己を責めても致し方ないと分かっていた。

デガルは即座に極刑に処されることはなかった。王としては、グラギオンという国にとって失い難い者だと考えているのだろう。また、今回のことも決して私利私欲の為ではなく、主の為に犯した罪だったのだ。

”不滅の種”とは、その名から連想されるように、食せば不老長寿となる。不治の病も、致命傷を負った怪我人でさえもたちどころに治るという、おとぎ話のような代物なのだ。ベルヴォルフによれば、効果のほどがどの程度かは分かりかねるが、かなり優れた万能薬的な物だったらしいとは王族のみが閲覧できる正式な古文書に示されていたという。

第4話

その魅力は強く、かつては幾つかに分かれていた部族の間で血塗られた争いが勃発したこともあるという。厳しい環境にあっていつ死ぬかも分からなければそれも当然である。国が成立してからは下火になり、やがてその存在は希薄になっていった。もともと、発芽・生育に大きな制約が立ちだかつて”種”があっても芽が出ないという状況だったのだ。新鮮な種子は、その当時からほぼ全く無かった。あってもすぐに使用されてしまったからであろう。そして、その乾燥した”種”は、そのうち城に献上されはしたものの、日の目を見ることはなかった。物好きな城付きの医師が、細々と研究しているだけだったのだ。その医師も、結局城の為にも自分の為にも新たに”種”を生み出すことは叶わず死に絶えた。最後にその医師は、”種”を自身が調べた発芽条件と共に、どこかへ隠し去った。

長い間、王族からでさえもそのことは忘れ去られていた。”種”は、本当に童話に姿を変えてしまっていた。

しかし、ベルヴォルフの曾祖父の代に再びその古書と種を発見し、危険物として処理されることが決定された。だが、結局それらは燃されることなく地底湖洞に置かれることになった。それ以後、その所在は王位継承の際に先王と次王の間での極秘の伝承の中に含まれるだけである。極秘と言っても、政に直接関係があるのでもなく、先々王・先王も堅実であったため使用されることもなく、またそれを管理することもなかった。そうして放置されているのを、もちろんベルヴォルフも伝え聞かされた。

グラギオン王家の秘法、『城眼』は城の内部を見通す術だ。道具を使わなくとも行えるが、執務室にある壁掛けを用いた方が鮮明且つ広範囲で見ることが可能になる。だが、例の地底湖周辺は城とみなされておらず、探索の手は伸びなかった。それがデガルには時間稼ぎになっただろう。しかし、ベルヴォルフが記憶を漁り、地下を思い出したことが彼にとって破滅の始まりだった。

不老長寿にデガルが手を出そうとしたのは、良く言えば忠誠からだった。彼は、謁見の前にベルヴォルフの身体における異変を知ってしまったのだ。

「貴公、どこか悪いのか？」

思わず問うたクラディアンに、ベルヴォルフは表情を変えずに告げた。

「本来なら他国の王に漏らしはしないが……。――私は短命だ。ある病に侵されている。今はまだ執務に支障はないが、それもいつまでもつか。おまけに私はまだ后を娶っておらず、子を成していない。デガルが暴挙に出るのも道理なことだ――だからと言って、私の将来を思うあまりにグラギオンの将来を潰すような真似をしたことは断じて許されることではないがな」

第4話

”不滅の種”の発芽には、毒のきかない人間が不可欠である。養分は普通の人間を用いても問題ないのであろうが、発芽し、養分を吸収し始めると同時に強烈な毒を排出する。常人では僅かも耐えられずに死に至り、拳句”種”は養分不足になり蕾も付けずに枯れる。

毒の効かない人間。そんな非現実的な者がいるのか不確かなままに、デガルはそれを求めた。かつて部族で行われた、赤子に少しずつ毒を与えて耐性を付けさせながら育てるという方法も古書には載っていたらしいが、それとて常に成功したわけでもなく、何より気長に待つ時間はなかった。

デガルにはグラギオンが直接尋問したという。聞けば宿主探しにはまず、身近な者で試したのだという。皮膚がかぶれる程度の微量な毒液を常に所持し、数滴を魔法で皮膚に気づかれないよう付着させた。すぐにかゆみが出るため、手軽に”検査”が出来たのである。しかし、謁見までの短期間ではそう簡単には発見できなかった。エンディウス王国訪問の日になり、謁見に臨んだ。期待を持たずに出来る限り隣国の者も調査した。クラディアン自身には、流石に行わなかったのだろう。言われてみれば確かにあの日は謁見後、部下がやけに背中や腕をしきりに搔いていた事が思い出せた。

デガルには、一瞬奇跡のように感じられたかもしれない。夕食後の会談で待っていたのは、美しい薬師であったが、デガルは躊躇わずに毒液を飛ばした。しかし、一向に痒そうなそぶりさえ見せない。衛兵の中には、王の手前痒みを我慢する者もいたが、すぐに分かった。およそ訓練には無縁であるはずの薬師が隠せるわけはなく、しかし席を外すこともなく会談が終わって彼は確信した。薬師ならば多少の耐性が付いているはずだと考えたのかもしれない。とにかく、次の謁見までに計画を立てて実行することを決心した。

そして、耐性はないが知識を持つ媼に協力という名目の脅迫をした。その時、媼が皮肉交じりにその耐性が大したものではなく、計画が失敗したらただでは済まないと言われ、彼女の作れる中で最も毒性の高いもので以って最終検査を行ったのだろう。想像以上の成果に、歓喜と共に驚きを隠し得なかったはずである。さらに媼のところに運んで、毒のみならず薬でさえも効かないことが判明した。

満を持して、ランシャはベルヴォルフへの供物として選ばれた。

だが、計画は最終段階で、ベルヴォルフ自身の手によりデガルにとって最悪の形で崩れ去った。

「デガルは今どうしているのだ」

「力を奪って拘束し、常に監視してある。……まだ処罰は下していない。貴公には癪かもしれませんが、我が国に不可欠な男であることは確かだ。ただ、もう貴国に送ることは永遠にないだろう」

「それだけで十分だ。裁量はそちらに任せる」

「……貴公の方はどうだ」

「ランシャか。――まだ目を醒まさない。が、いつまでも待つさ」

第5話

長いまつげが震え、瞼がゆっくりと開くと、うるんだ紫の瞳が光を放った。唇が開き、吐息が漏れる。傍らに控えていた老医師が慌てて侍従を呼んだ。

「ここ……は」

ゆっくりとした動作で起き上がろうとするランシャを抑えて、穏やかな口調で老医師は答えた。

「ここはエンディウス城です。よくお目覚めになられた……国王陛下もさぞお喜びになることでしょう」

そうして微笑んだ。つられてランシャも笑みを浮かべた。長らく死人のように白かった頬に血の気が戻っている。国王、という言葉にはっとした表情を浮かべた。

「クラディアン様は……」

「記憶障害もなさそうですね。ご心配なく、間もなくこちらにいらっしゃるでしょう。あなたが眠っている間、毎日ここへお見えになっていました」

医師がそう言い終わる前に、外から駆ける靴音が響いてきた。部屋の戸が蹴破られる勢いで開くや否や、クラディアンが中へ風のように入ってきた。

「ランシャ!」

「クラディアン様……」

寝台に駆け寄りクラディアンの目に、涙がうっすらと浮かんでいるのがランシャに見えた。老医師は気を使って、「後でまた診察に伺いましょう」という言葉を残して部屋を出て行った。

先ほどまで老医師が座っていた椅子に腰かけ、クラディアンはランシャの手を両手で握りしめた。

「良かった……情けない話だが、このまま目覚めなかったらという恐怖に日々怯えていた」

まだ弱々しい力で、ランシャは握り返した。先の事件で、ランシャに魔法が使えないことが判明し、純粋な医術しか用いることができなかつたため、身体が一回り小さくなったように見える。

「ご心配をおかけしました。……私はいったいどれほど眠っていたのでしょうか？」

「今は夏の盛り、四の月だ。つまり、ひと月半ほど昏睡していたことになる」

「そんなに長く……庭園はどうなっていますか？」

クラディアンは苦笑いした。ようやく覚醒したばかりで自分の仕事場のことを気に掛ける余裕があるのに、驚くよりも呆れてしまったのだ。

「問題ない……とは言えないが、管理はきちんと行っているよ。体力が回復すれば、すぐにでも仕事にかかれるだろう」

ランシャは笑みを浮かべた。しかし、すぐにその笑顔は曇ってしまった。

「どうした？」

「どう聞いてよいか分からないのですが……デガルという人に襲われてから私はどうなったのですか?記憶が曖昧で、気を失ってからの記憶がほとんど残っていないのです」

それを聞いて、クラディアンは全てを話すべきかどうか少し迷った。事件のことは、ランシャにとって辛苦極まるものであり、出来ることなら伝えずにおきたかった。弱った心身をこれ以上傷つけるようなことはしたくなかったのだ。すると逡巡を察して、ランシャが口を開いた。

「お願いします、クラディアン様。すべてを話して下さい。たとえどのような目にあわされたとしても、私は私の身に起こったことを知らなくてはなりません」

真剣な視線がクラディアンを射抜いた。

「分かった……その前に君の命を危機にさらしたことを謝らせてほしい。前兆はあったのに、それを見逃したのは国王としても、君の身近にいた者としても生涯負うべき責だ」

「そんなことを言わないでください」

うなだれたクラディアンにランシャが動揺して首を振る。

「こうして私をエンディウスに連れ戻して下さったのですから、クラディアン様が心煩わせることなどありません」

きっぱりとした口調に幾分救われる思いをしながら、クラディアンは話をする決心をした。

第5話

話が終わると、ランシャはやや青ざめた顔をして黙り込んだ。微かに掛け布の上に乗せた両の手が震えていた。クラディアンは、やはり話すべきではなかったかと後悔し始めていた。

「……ですね」

「え？」

小さく呟かれた声はよく聞き取れなかった。聞き直しかけた時、ランシャが顔を上げた。その目には、強い哀しさが浮かぶ。

「知ってしまったのですね。……私が、毒も薬も簡単には効かないということが……あなたをこれまで欺いていたということが……」

涙をこらえるように、ランシャは何度か目をしばたいた。クラディアンは、己の知らなかった事実が付き、衝撃を受けた。

「では……君は知っていたのか、自分の体質について」

うつむいたまま、ランシャは首肯して両手で顔を覆った。

「申し訳ありません……薬師としてあってはならないことです。処刑されても文句は言えない状態で、私は何年もその座に留まっていた。……どうか、私を欺罪として裁いてください」

「待ってくれ！」

クラディアンはランシャの悲痛な声を遮って叫んだ。あらかじめ聞かされていたとはいえ、本人の口から出た言葉に動揺を押し殺せない。

「そんな……一体なぜ黙っていたのだ？それに、毒も薬も効かないのなら何故今まで仕事が出来ていたんだい？君の作ってくれていた薬茶はよく効いていたんだ。前に言っていたろう、毎年の気候などによって薬草の状態も変わってくるから、この仕事はとても繊細なのだ……」

ランシャはようやく視線を上げ、そしてひどく悲しい顔をして笑った。

「効能が強いものには今回のように多少は反応しますが、効かなくても味や風味は分かります。幸いながら味覚は鋭敏な方でしたので一度含めばそれを覚えることができ、そうしてこれまでやってこれたのです。ですから、たとえごく微量でも毒が仕込まれていたのであれば貴方様が口に含む前に知らせることができたでしょう……ただし、それは裏を返せば、仮に私が毒を仕込めば容易に暗殺できるということになります。判明してしまえば私はこの城に……いいえ、この国にいられなくなります。それを恐れて、ひたすらに隠し続けてきました。何よりも、クラディアン様には知られたくなかった」

言葉に詰まり、嗚咽をこらえる様子のランシャに、クラディアンはかける言葉を失った。

「しかし……君は悪意あって秘匿していたわけではないのだろう？そうであったなら私はとっくにこの世を去っているはずだ」

ランシャはこの言葉に激しくうなずいた。そのはずみに、数滴の雫が散る。

「もちろんです！貴方様に誓う忠誠が揺らいだことさえ一度もありません。クラディアン様に不安を与え、そして離れなければならないことが最も恐かったのです」

その言葉は何よりも鋭くクラディアンの胸を貫いた。

「……前薬師はそのことを知っていたのかい?いや、むしろ知らない方がおかしいか……」

クラディアンの言葉にランシャは頷いた。

「お察しの通り、先代は私を引き取ってすぐに気が付きました。分かっているながら、私に薬術を授けてくださったのです。城においてくれた王、そして王子つまりクラディアン様のことが一に心から感謝し、忠誠を誓って恩を返すのならと……」

「そうだったのか」

「はい、ただこの身体が時として危険になることも杞憂していました。軽微な毒であれば、私の身体は何の症状も発しません。そのため、もしものことがあれば私たち二人を危険な目に合わせると、厳しい修行を行いました。私はそのおかげで、あらゆる薬や毒の風味を正確に記憶し、先代亡き後も役目を継ぐことが出来ました。ですが……それもここまでです。どうか、私を裁いてください。貴方様にこれ以上ご迷惑を掛けられません」

あくまでも自分の秘事を隠匿として罰せられるつもりであるのを感じたが、クラディアンは首を縦に振りたくはなかった。王としてはもちろん、欺罪に処さなければならないだろう。しかし、話を聞く限り、また自分がこれまでにうけた数々の処方から、そして自ら接してきた日々を思い返して、ランシャをそんな処遇に置くことなど到底考えられなかった。

「……それは、できない」

「クラディアン様！」

「君の働きは、そしてその忠誠心は、私自身が良く分かっている。ランシャ……」

強い意志を込めた視線を投げかけ、クラディアンは一息に己の心情を吐露した。

「君にこの城を離れて欲しくない……いや、私のそばを離れないでほしいんだ」

ランシャが息を飲んだ。

「出来れば罪悪感など感じることなく……これまでのように、その腕と笑顔で私を支えて欲しいんだ。私もランシャと同じ気持ちだ」

再び頬を伝い始めた涙を隠すように、ランシャは再び顔を手で覆った。嗚咽が漏れ、細い体が小刻みに揺れる。その肩を、クラディアンはそっと抱いた。

第6話

季節は巡り、六の月。

国内の収穫もほとんど終わり、国民は間近に迫る冬の支度に忙しい。

薄晴れの中、城の最上階にある硝子の半球が優しげに光を反射する。

――今日も透明な天井の下、宮廷薬師が王のために働いている。